VOLUME 1 • ISSUE NO. 1 (2020)

MITIS JOURNAL

Journal of Mizuno Institute of Translation and Interpreting Studies

MITIS
MIZUNO INSTITUTE OF TRANSLATION
AND INTERPRETING STUDIES

目次

日本における通訳者のキャリア形成プロセスの類型　新崎隆子　1

Walden の邦訳比較：情報構造の視点から　水野　的　19

編集後記　47

投稿規定　48

研究

日本における通訳者のキャリア形成プロセスの類型

新崎隆子
会議・放送通訳者

This paper proposes that there are five types of career development processes for professional interpreters in Japan based on the results of a questionnaire survey conducted in 2017 by a project group of the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

Type 1. Those who intend to become professional interpreters after graduating from university and start a career before the age of 30.

Type 2. Those who intend to become professional interpreters after graduating from university and start a career in their 30s.

Type 3. Those who start a professional interpreter career as a job change before the age of 50.

Type 4. Those who intend to become professional interpreters in middle age and start a professional career after the age of 40.

Type 5. Those who start a professional interpreter career as a job change after the age of 50.

The survey report provides quantitative data such as age, gender, place of residence, employment status, and job satisfaction. However, it fell short of drawing a comprehensive picture of the career development process. Type classification of professional interpreters' career development processes provides useful information for those who are interested in becoming a professional interpreter in the future.

1. はじめに

本稿は日本の通訳者のキャリア形成プロセスを 5 つの類型に分けて示し、その特徴を検討するものである。類型化にあたっては、日本通訳翻訳学会「日本における通訳者のキャリア開発プロセス実態調査」プロジェクトが 2017 年に実施した質問紙調査で得られたデータを用いた。

この調査は 2017 年 8 月から 9 月にかけて、主に日本で訓練を受け、有償で通訳のサービスを行う人たちを対象に質問紙調査として実施され、199 人から回答を得た。これにより得られた量的データの報告は「日本における通訳者のキャリア開発プロセスに関する実態調査」（新崎ほか, 2019b）として、また自由記述から得られた質的データを分析した論文は「キャリア形成に関する通訳者の認識」（新崎ほか, 2019a）として、『通訳翻訳研究』第 19 号に掲載された。

調査報告（ibid.）は年齢、性別、居住地、通訳者になるまでのプロセス、就業状況、経済的自立、仕事への満足度などの量的データを項目別に記述したが、キャリア形成プロセスを包括して検討するには至らなかった。本稿では一部の質問項目への回答を基にして調査協力者のキャリア形成プロセスを 5 つの類型に分け、その特徴を概観する。これにより通訳者のキャリア形成プロセスを分かりやすく示すことが可能になり、今後、通訳者育成に携わる人たちやプロ通訳者を目指す人たちの手がかりになると思われる。

2. キャリア形成に関する先行研究

キャリアに関する調査研究は様々な分野で行われているが（羽田野, 2007; 荒木ほか, 2017）、それらの目的は主にキャリアの現状の断面を示すことに置かれているようである。通訳研究の分野では Gentile (2013) や Katan (2009a, 2009b) が年齢、性別、居住地域、経験年数、収入、仕事の分野、職業観などについて質問紙調査を行い、項目ごとに通訳者の現状を示した。また翻訳研究の分野では Fraser & Gold (2001) が質問紙調査により、職業として翻訳者を選んだ動機、料金を含めた仕事のコントロールに関する自律性 (autonomy)、収入などについて現状を報告した。しかし、いずれも仕事を志望した動機や教育課程などを含めたキャリア形成の過程の類型化はしていない。

キャリアの類型化を試みた研究もある。日本政策金融公庫総合研究所（2018）はフリーランスを「収入重視型」「仕事重視型」「生活重視型」の 3 つの類型に分け、フリーランスの現状について報告した。また、2017 年に設立されたプロフェッショナル&パラレルキャリア・フリーランス協会は『フリーランス白書 2018』の中でフリーランスの職種をデザイナーや編集者などの「クリエイティブフリーランス」、エンジニアやライターなどの「ビジネスフリーランス」、スタイリストや美容師など特定の技能を提供する「職人フリーランス」の 3 つに分け、雇用形態については、雇用関係のない「独立系フリーランス」と企業や組織に雇用されながら副業としてフリーランスの仕事をする「副業系フリーランス」、業務範囲については、期間や作業内容を基に「タスク型（スポット型）」「プロジェクト型」「ミッション型」に分けて現状を報告した。しかしこれらの類型化はキャリアの現状に関するもので、キャリア形成のプロセスについては触れていない。キャリア形成のプロセスを類型化して示した研究としては、労働経済学の分野で脇坂（1993）が女性のキャリア形成を職場類型の視点から分析した研究と、経営学の分野で細萱ほか（2017）が 4 つの類型に分けて女性のグローバルキャリア形成の過程を論じた研究があげられる。

キャリア形成理論では、Donald E. Super が①成長（4 歳～13 歳）、②探求（14 歳～24 歳）、③確立（25 歳～44 歳）、④維持（45～65 歳）、⑤下降段階（65 歳以上）の 5 段階を提唱し、のちにこれをライフ・スペース（生活空間）における複数の役割と結びつけたキャリア・レインボーというモデルを作った（Super, 1980）。これによりキャリアは人間の一生を通じてダイナミックに変化するものであることを指摘したが（武石, 2016）、キャリア形成のプロセスを類型化して説明することはしていない。また、このモデルは安定的な社会構造の中で終身雇用型のキャリアを歩

む人を念頭においているため、非正規雇用など就業形態の多様化する時代には必ずしもあてはまらない（武石, 2016）。

古畑（2012）は企業の人材開発の視点からキャリア形成のプロセスには「キャリアビジョン先行型」と「ジョブデザイン重視型」の二つのタイプがあると述べている。「キャリアビジョン先行型」とは主体的にキャリアビジョンと目標を定め、それを実現しようとすることから、キャリアの自立を達成する上では理想的だが、視野が狭く環境の変化への対応が遅れるという弱点があり、「ジョブデザイン重視型」は、周囲の環境に対応して、調整しながらキャリアを形成していくため、主体性や目的意識が明瞭ではなく受け身的な姿勢になりがちだという弱点があるが、キャリアを取り巻く環境が不安定で先を見通すのが難しい時代には実際的なタイプかもしれないと示唆した。看護研究の分野では Styles (1982) が看護師の職業的アイデンティティについてプロフェッションフッドという概念を提唱した。これは専門職としての通訳者にも適用できる概念だが（新崎ほか, 2019a）、キャリア形成プロセスは提示されていない。

キャリア形成に関する以上の先行研究は、通訳者のキャリア形成を明らかにする上で参考になるが、将来通訳者を目指す人たちやその指導者に役立つような方向性を示すためには、通訳者の実態を把握した上での具体的な検討が必要だと考えた。そこで「日本における通訳者のキャリア開発プロセス実態調査」プロジェクトが 2017 年に実施した質問紙調査で得られたデータを活用することにした。次に調査の概要と類型化の方法について述べる。

3. 調査の概要

調査（新崎ほか, 2019b）は、日本でプロ通訳者を目指す人たちへのキャリア形成指導の根拠となるデータを提供することを目的とし、主に日本で通訳技術を習得し、日本を中心に有償で活動する通訳者を対象とした。調査協力者は団体などを通じた募集法と調査者の知り合いに依頼する縁故法、さらに調査協力者の紹介による雪だるま式標本法を組み合わせて集めた。郵送による無記名の質問紙調査を実施して得た有効回答数は 199 である。

質問紙は 5 つのパートから成り、I. プロフィール（年齢、性別、居住地、プロ通訳者としてデビューした時期、通訳歴、通訳をする外国語、英語の資格、通訳の種類、主な仕事の分野）、II. 通訳者になるまでのプロセス、III. プロ通訳者としての就業状況、IV. 通訳の仕事をする上で直面している問題、V. 通訳の仕事に対する満足度について選択式回答を求め、最後に通訳の仕事に関する自由記述欄を設けた。

4. キャリア形成プロセスの類型化の目的

本稿のねらいは調査協力者が何歳ごろに通訳者になることを志し、どのような道筋をたどって何歳ぐらいでプロ通訳者になったのかを調査データに基づいて分かりやすく説明することである。そこで「デビューしたときの年齢」、「学業を終えた後の職業として通訳者を目指したかどうか」の 2 つの側面に注目した。その結果、「プロまっしぐら型」「遠回り・プロ志向型」「転職型」「生活安定・自己実現型」「壮年転職型」の 5 つの類型に分けることができた。次節では類型化の手が

かりとした 2 つの側面を詳しく紹介する。なお、数値データは小数点を切り捨てて示している。

5. 類型化の手がかりとした 2 つの側面

5.1 デビュー年齢

この調査（新崎ほか, 2019b）には「デビュー年齢」についての質問項目が含まれていない。そこで、調査項目にある「2017 年調査時現在の年齢」と「デビューした時期」を基にデビューしたときの年齢を計算し、推定デビュー年齢を算出した。

5.1.1 調査時の年齢

無回答の 19 人を除いた 180 人の年齢構成は、20 代 1 人、30 代 15 人、40 代 44 人、50 代 81 人、60 代 37 人、70 代 2 人で、最年少は 25 歳、最高齢は 74 歳だった。平均は 52 歳となる。

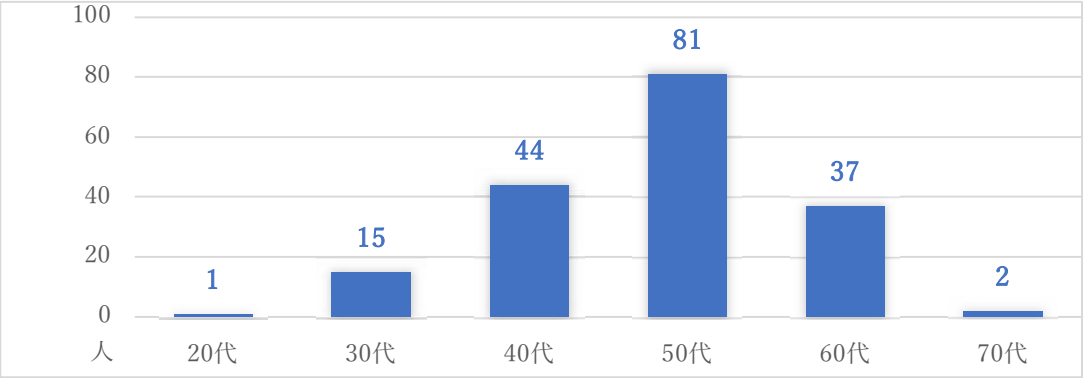

図 1. 調査時の年齢 （n=180）

50 代が最も多く、次に 40 代と 60 代が続いている。これは調査協力者を集める際に団体を通じた募集法だけでなく、調査者が知り合いに声をかける縁故法や、調査協力者がさらに個人的知り合いに紹介する雪だるま式サンプリング法が用いられたことが影響しているかもしれない。5 人の調査者の年齢が 40 代から 60 代であったため、声をかける知り合いに同年齢の人たちが多くなった可能性が考えられる。

5.1.2 デビューした時期

調査（新崎ほか, 2019b）ではプロ通訳者としてデビューした時期を西暦で書き込むように求めた。これを年代ごとにまとめると、無回答 6 人を除く 193 人の内訳は、1960 年代 1 人、1970 年代 5 人、1980 年代 47 人、1990 年代 49 人、2000 年代 56 人、2010 年代 35 人だった。80 年代、90 年代、2000 年代の間に大きな差はみられない。また 2010 年代については、調査が 2017 年に行われたことを考慮すれば 7 年間のデビュー人数ということになるため、デビューした通訳者が必ずしも減少したとは言えない。1980 年代以降のデビュー時期については比較的偏りのないサンプルが得られたと考える。

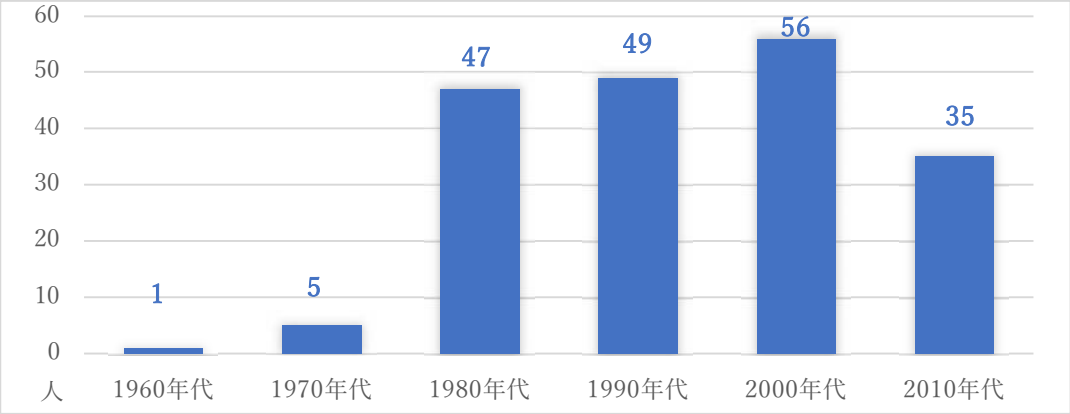

図 2. デビューした時期 （n=193）

5.1.3 推定デビュー年齢

「調査時の年齢」と「デビューした時期」の両方に回答した 176 人について推定デビュー年齢を概算した。平均は 33 歳、最も早いのは 14 歳、最も遅いのは 58 歳だった。他の 23 人は「調査時の年齢」と「デビューした時期」のいずれか、または両方が無回答のため、デビューした年齢を推定することができなかった。

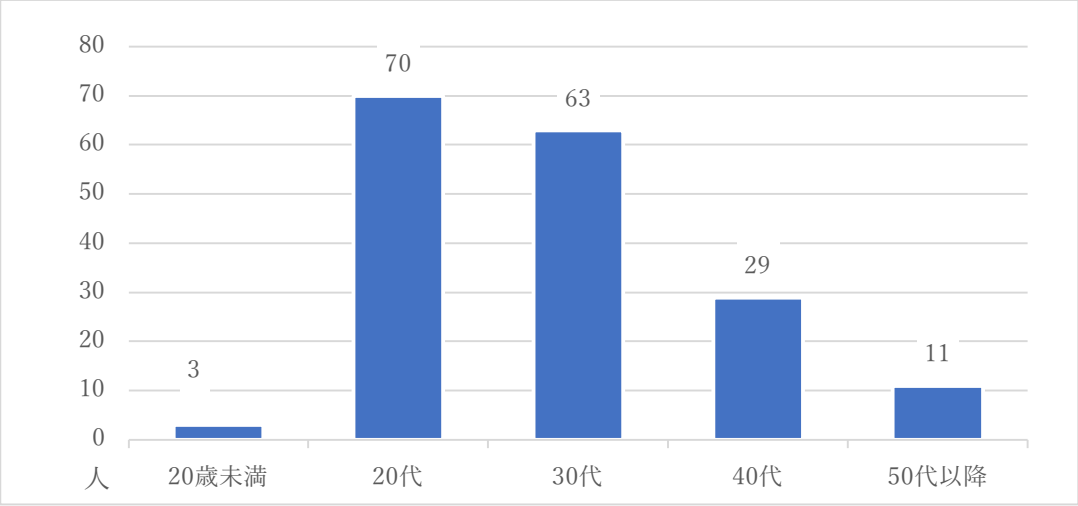

図 3 推定デビュー年齢（n=176）

年齢群別に見ると、20 歳未満 3 人、20 代 70 人、30 代 63 人、40 代 29 人、50 代以降 11 人で、大半の通訳者が 20 代または 30 代にデビューしていることが分かる [1]。「調査時の年齢」と「推定デビュー年齢」を見ると、日本の通訳者の平均像は、2017 年現在およそ 52 歳で、33 歳ごろにデビューしているということになる。

5.2 学業を終えた後の職業として通訳者を目指したかどうか

通訳者のキャリア形成プロセスを明らかにする上で、職業として「通訳者」を最初から目指し

たのか、それとも生計の手段は別に確保した上で「通訳」を趣味かアルバイトのように始めたのか、あるいは就職した企業を辞めてそれに代わる職業として選択したのかなど、「通訳」の職業としての実現可能性の捉え方に関する検討は欠かせない。残念ながらこの調査（新崎ほか, 2019b）には「学業終了後に職業として通訳者を目指したかどうか」を直接尋ねる質問項目はなかった。しかし、5.1.3 で示したように通訳の仕事を始めたと思われる年齢が 30 代以降と推定される人は 103 人になる。その人たちは学業を終了して以降、プロ通訳者となるまでの期間、どのように、通訳にかかわっていたのだろうか。

その答えを推測する手がかりを「通訳者を志したきっかけ」として「転職」を選んだかどうかに求めた。「通訳者を志したきっかけ」については複数回答可能の指示があり、「語学が好き」「帰国子女」「専門職につきたかった」「誰かに勧められた」「通訳者の活躍を見て自分もやりたくなった」「イメージにあこがれた」「他に仕事がなかった」「転職」の 8 つの選択肢と「その他」の自由記述欄が設けられていた。

「転職」とは言うまでもなく、職業を変えることである。総務省（1997）によれば職業は「個人が継続的に行い、かつ、収入を伴う仕事」と定義されている。「転職」をきっかけに通訳者を志したという人には、その前に通訳以外の継続的で収入を伴う仕事があったということであり、学業終了後すぐに職業として通訳者を目指すことはなかったと解釈してよいだろう。「転職」については正規職か非正規職かの区別はしていない。「転職」にチェックを入れていない場合は、通訳者になる前に収入を得る何らかの手段があったとしても、それを継続的で収入を伴う職業と考えていなかったと推測される。「転職」を選んだのは無回答の 1 人を除く 198 人中 47 人だった。

6. キャリア形成プロセスの類型化

「プロ通訳者としてデビューしたときの年齢」と「学業終了後の職業として通訳者を目指したかどうか」の 2 つの側面に関して生データに基づく推定データが利用できたのは 176 人であった。しかし、そのうち 1 人は推定デビュー年齢が 14 歳であるにもかかわらず、通訳者になったきっかけとして「転職」を選んでいた。義務教育対象年齢の 14 歳未満で継続的で収入を伴う職業についていたとは考え難いため、そのデータは無効として、175 人についてキャリア形成プロセスの類型化を試みた。

「通訳者を志すきっかけ」について「転職」を選ばなかった人は、学業修了後の最初の職業選択として通訳者を選んだ、または何らかの理由で他の継続的で収入を伴う職業につかなかったということである。そのうち 30 歳未満でデビューした人を「プロまっしぐら型」、30 代でデビューした人を「遠回り・プロ志向型」と名付けた。「転職」を選んだ人たちはデビュー年齢が 40 代までを「転職型」、50 代以降を「壮年転職型」とした。「転職」を選ばなかった人たちのうち、通訳の仕事を始めたデビュー年齢が 40 歳以降の人たちは、それまでに他に生計の手段があったと見られることから、経済的理由ではなく生きがいなど自己実現を求めて通訳者の道を志したと考えられるため「生活安定・自己実現型」と名付けた。それぞれの類型ごとに「通訳になりたいと思った年齢」「デビュー年齢」「通訳者を志すきっかけ」「帰国子女の比率」「なりたいと思ってからデビューするまでの期間」「経済的自立」についての特徴を分析した。

次節では各類型の特徴のうち、5 節で述べなかった「通訳になりたいと思った年齢」「帰国子女の比率」「なりたいと思ってからデビューするまでの期間」「経済的自立」について全体像を示す。

7. 各類型の特徴

7.1 通訳者になりたいと思った年齢

「通訳者になりたいと思った年齢」の有効回答数は 178、無効回答数は 21 だった [2]。

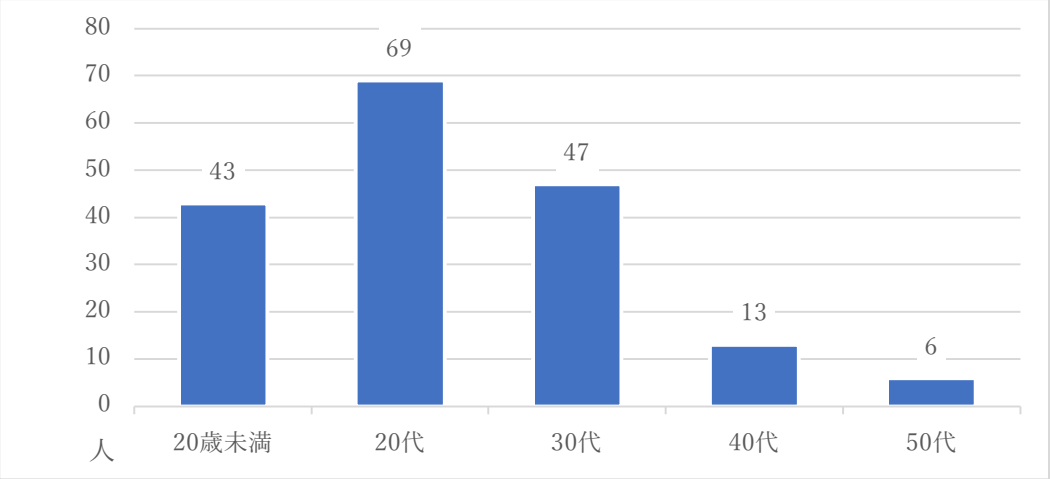

図 4. 通訳者になりたいと思った年齢 （n=178）

通訳者になりたいと思った年齢の平均は 26 歳で、最も早いのが 5 歳、最も遅いのが 58 歳だった。最も多いのは 20 代（69 人）だが、10 歳未満と答えた 3 人を含む 20 歳未満が 43 人いたことから、およそ 4 分の 1 が未成年のころから通訳者になるという希望を持っていたと考えられる。その一方、30 代以降を合わせると 66 人になり、人生の経験をある程度積んでから通訳者になりたいと思った人が 3 割以上いることが分かる。「5 歳のときに通訳になりたいと思った」という記憶の信ぴょう性に疑問を抱く人もいるかもしれないが、母親など身近な家族に通訳者がいる環境で育った人には大いにありうることである [3]。少数だが、通訳者になりたいと思った年齢がデビュー年齢よりも高い人がいた。調査（新崎ほか, 2019b）ではその理由を尋ねていないため確定はできないが、通訳者になりたいと思うより先に仕事を受け始め、続けるうちにやる気が出てきたということではないかと推察される。

7.2 帰国子女の比率

帰国子女については「日本人の未成年者で、親の仕事のために少なくとも 3 か月間海外で生活し、主流の教育システムにおいて教育を続けるために帰国した者」という Goodman の定義があるが（Sueda, 2014）、本稿では複数回答を可能とした「通訳者の道を志したきっかけ」の選択肢に含まれる「帰国子女」を選んだ人数で比率を計算した。この質問に対する総回答数 449 のうち、帰国子女を選んだ数は 45 だった。調査（新崎ほか, 2019b）の有効回答数 199 を分母と

するとおよそ 23 パーセントとなる。ただし、この質問は「通訳者の道を志したきっかけ」を尋ねているのであって、直接、帰国子女というアイデンティティを持っているかどうかを尋ねたわけではない。帰国子女であることを、通訳者を志望するきっかけと結びつけなかった人がいる可能性はある。ただ、この質問は複数回答が可能であり、帰国子女と自認する人が意図的にそれを選ばなかった可能性は低いと思われるため、ある程度の傾向を示すと受け止めた。

7.3 デビューまでの期間

「デビューまでの期間」は「通訳者になりたいと思った年齢」のデータと、5.1 で示した「デビュー年齢」の差に基づいて計算し、なりたいと思ってから何年ぐらいで通訳の仕事を始めたかを示した。通訳訓練の開始時や終了時を起点とすることも検討したが、調査（新崎ほか, 2019b）の質問項目には含まれていなかったことや、通訳訓練には大学の通訳コースや民間の通訳学校での訓練だけでなく短期のセミナーや独学などの多様な訓練の機会があり通訳訓練の開始や終了の時点を特定しにくいという問題があるため、調査の質問項目に含まれていた「通訳になりたいと思った年齢」のデータを用いることにした。

7.4 通訳で経済的自立ができたと感じるまでの年数

経済的自立ができるかどうかは、職業選択をする際の重要な判断基準である。調査（新崎ほか, 2019b）では通訳者の稼働状況や時間当たりの平均報酬に関する回答を集めたが、本稿では回答者の主観的な答えを用い、実際の収入金額には注目しなかった。通訳者は通訳の仕事以外に翻訳や通訳学校の講師、大学の教員など兼業に従事している人が全体のおよそ 6 割を占める。この質問は、通訳の報酬のみで経済的自立できると感じられるかどうかを尋ねたものであって、回答者の全般的な経済自立性を問うものではないことに留意する必要がある。

有効回答数 197 中、デビューから 5 年以内に経済的自立ができたと感じた人はおよそ半数の 97 人、6 年以上 10 年以内がおよそ 19 パーセント、36 人、10 年以上かかった人は 4 パーセント、8 人、今も経済的自立ができていないと答えた人はおよそ 14 パーセント、46 人だった。

8. 通訳者のキャリア形成プロセスの類型化

8.1 プロまっしぐら型

「プロまっしぐら型」は学業終了後、職業として通訳者を目指したと見なされ、30 歳未満でプロ通訳者として仕事を始めた人を指す。分析対象の 175 人中、30 歳未満で通訳者としてデビューしたのは 72 人でそのうち転職にチェックを入れていなかったのは 60 人である。この人たちは通訳者になる前に継続的で収入を伴う職業につかなかったと見なされる。通訳者になりたいと思った年齢については無回答の 4 人を除く 56 人の平均が 21歳で、最少年齢は 7 歳、最高齢は 38 歳である。「2017 年調査時現在の年齢」と「デビューした時期」を基に推定したデビュー年齢の平均は 25 歳である。7 人はデビュー年齢よりもなりたいと思った年齢が高かった。このうち 2 人はその差がマイナス 1 年なので誤差の範囲と考えたが残りの 5 人はマイナス 3～12 年となっていた。これは特に通訳者になりたいと思わずに仕事をし始めたが、その後に「通訳者を続

けたい」という意志が固まったと推察される。この 5 人を除いた 51 人の「なりたいと思った年齢」から「デビュー年齢」までの年数を計算すると平均 5 年で、通訳者を志してから比較的短時間にデビューしていることが分かる。また、通訳者になりたいと思った年齢から1年未満にデビューした人が 6 人、1 年が 6 人、2 年が 8 人、3 年が 7 人で、60 人中 27 人が 3 年以内にデビューしている。通訳者になりたいと思ってから 1 年以内に仕事を始めた 12 人は訓練を受ける前から、あるいは訓練を始めてすぐにデビューできたと推察される。

通訳者になりたいと思った年齢が低いことから帰国子女が多いと想像されたが、60 人中帰国子女は 3 分の1の 20 人だった。帰国子女でなくても若いときから通訳者になりたいという気持ちを持っていた人が大半を占めた。

デビュー時期の平均は 1990 年で、年代で分類すると図 5 のようになる。

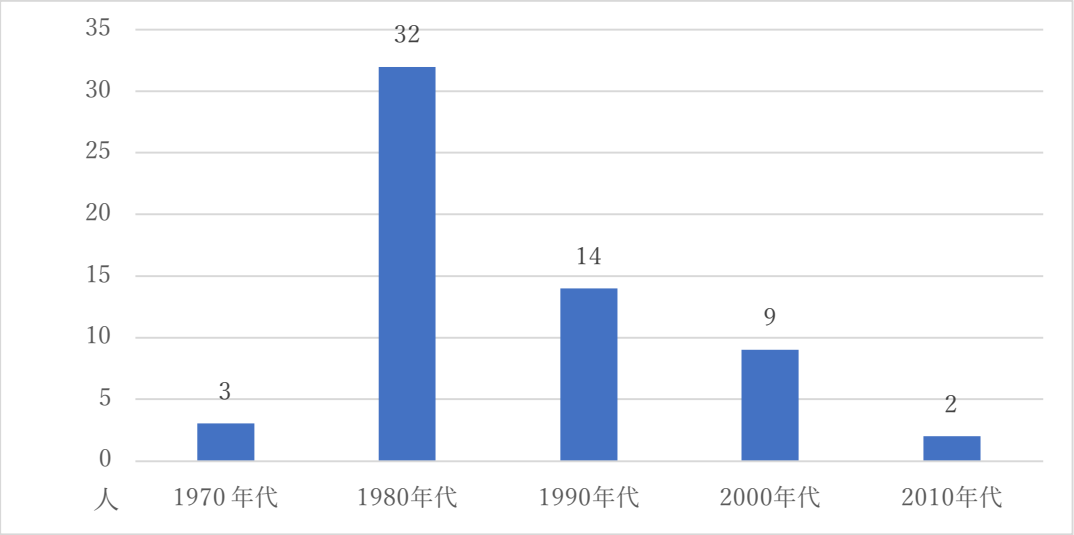

図 5. 「プロまっしぐら型」のデビューした時期 （n=60）

1970 年代 3 人、80 年代 32 人、90 年代 14 人、2000 年代 9 人、2010 年代 2 人で 1980 年代に半数以上がデビューしており、その数は時代が進むにつれて低下していることが分かる。1980 年代を前半と後半に分けると前半が 21 人、後半が 11 人で、デビューのピークが 1980 年代の前半だったことが示唆された。

通訳者として得た収入で経済的自立をしていると感じるかどうかについては 60 人中 57 人が自立していると感じると答え、40 人がデビュー後 5 年以内に主観的な経済的自立を果たしている。「自立していない」と答えた 3 人のうち 1 人は兼業として「翻訳、通訳・語学学校・大学の教員」、1 人は兼業として「翻訳と通訳・語学学校」を挙げ、もう 1 人は正規職についていて「海外営業、管理会計、役員サポートをしながら、通訳・翻訳も担当している」と述べている。全般的に「プロまっしぐら型」は通訳者を志した時期が早く、比較的短期間にデビューし、経済的に成功していると言える。

8.2　遠回り・プロ志向型

「遠回り・プロ志向型」は学業終了後、職業として通訳者を目指したがデビューしたときが 30 代の人たちを指す。「転職」ではないきっかけで通訳者になり、30 代でデビューした人は 41 人だった。「プロまっしぐら型」の人と同様に、通訳者になる前に継続的で収入を伴う職業についていない、またはそのような認識をもっていないと解釈した。通訳者になりたいと思った年齢は無回答の 3 人を除いた 38 人の平均が 26 歳であり[4]、「プロまっしぐら型」と比べると 5 年遅い。最少年齢は 5 歳、最高齢は 40 歳である。このグループにもデビュー年齢よりもなりたいと思った年齢が高い人が 6 人いた。このうち、その差がマイナス 1 年の 3 人については誤差の範囲と考え、マイナス 2 年以上の残り 3 人を除いた 35 人について通訳者になりたいと思ったときからデビューするまでの年数を計算したところ平均で 9 年となり、「プロまっしぐら型」と比べるとかなり長い。しかし中には、なりたいと思ってからデビューするまでの年数が非常に短い人も見られ、1 年未満にデビューした人が 6 人、1 年が 3 人、2 年1人、3 年が 2 人で、41 人中 12 人が通訳者を志望してから 3 年以内にデビューしている。この類型をデビューした時期の年代別に示すと図 6 のようになる。

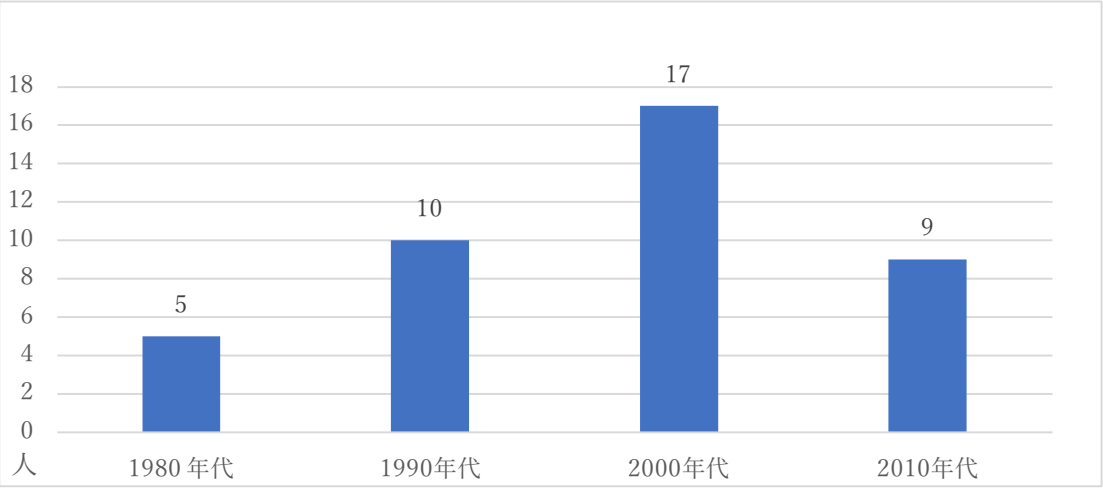

図 6.　遠回り・プロ志向型」のデビューした時期　(n=41)

「プロまっしぐら型」と異なり 1980 年代以前にデビューした人はいない。2000 年代前半が 8 人、後半が 9 人、2017 年までの 2010 年代が 9 人であることから、安定傾向と言えるだろう。経済的自立については無回答の 1 人を除く 40 人中 48 パーセント、19 人がデビュー後 5 年以内に経済的自立ができたと答えている一方で、28 パーセント、11 人が通訳の仕事のみによる経済的自立はできていないと答えている。通訳専業は 14 人で、残りの 27 人は通訳の収入による経済的自立の有無にかかわらず兼業として翻訳や通訳・語学学校、大学の教員、事務職など、複数の副業を選択している人が多い。帰国子女は 22 パーセント、9 人で「プロまっしぐら型」よりも少ない。

8.3　転職型

「転職型」は 50 歳未満で転職をきっかけとして通訳者になった人たちを指す。通訳者になるきっかけとして転職を選んだ人は 47 人だったが、そのうち 4 人は年齢やデビューした時期が無回答だったため分析の対象から外した。また 3 人は 50 代以降に転職しているため「壮年転職型」に分類し、残りの 40 人を「転職型」に分類した。

デビュー年齢は 20 代が 12 人、30 代が 22 人、40 代が 6 人だった。「転職型」の人は 30 代で通訳者になった人が半数以上を占める。通訳者になりたいと思った年齢は無回答の 2 人を除いた 38 人[5]の平均が 28 歳で、「プロまっしぐら型」よりもおよそ 7 年、「遠回り・プロ志向型」よりもおよそ 2 年遅い。最年少が 19 歳、最年長が 43 歳だった。ここでもデビュー年齢よりもなりたいと思った年齢が高い人が 2 人いた。その差がマイナス 1 年の場合は誤差の範囲としてほぼ同時期と考え、マイナス 2 年の差がある 1 人を除いた 37 人で計算すると、通訳になりたいと思ってからデビューするまでの期間は平均で 5 年であるが、小数点以下を示すと 4.6 年で「プロまっしぐら型」の 5.0 年よりもやや短い。また、なりたいと思ってから 1 年未満にデビューした人は 7 人、1 年が 4 人、2 年が 9 人、3 年が 1 人で、40 人中 11 人が 1 年以内、21 人が 3 年以内にデビューしている。帰国子女は 20 パーセント、8 人で、「遠回りプロ志向型」に近い。図 7 に「転職型」がデビューした時期の年代を示す。

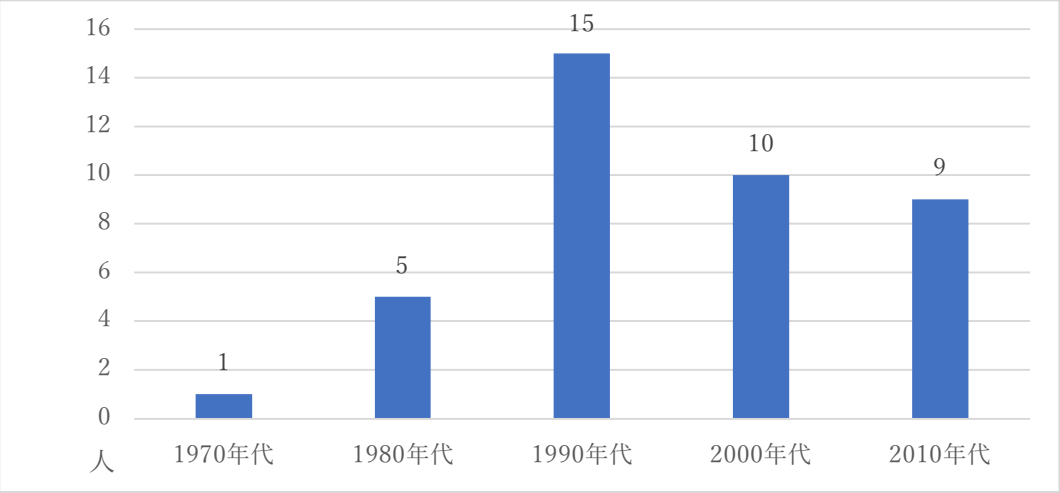

図 7. 「転職型」がデビューした時期 （n=40）

デビューした時期は 1970 年代 1 人、1980 年代 5 人、1990 年代15 人、2000 年代 10 人、2017 年までの 2010 年代 9 人で、1990 年代にピークをつけ、その後やや減少したが 2000 年代から 2010 年代は安定しているようである。経済的自立については無回答の 1 人を除く 39 人中 22 人がデビューから 5 年以内に自立したと感じると答え、「3 年目で自立したが、現在は家の事情で仕事を制限している」とした 1 人を加えると 23 人、59 パーセントになる。その一方で 18 パーセント、7 人が自立できていないと答えている。「遠回り・プロ志向型」と比較すると、「転職型」はデビュー後に比較的早く経済的に自立したと感じており、通訳の収入で今も経済的に

自立できていないと感じている人の比率は低いと言える。「転職型」は「通訳になりたいと思った年齢」が比較的高いにも関わらず、デビューが早く、経済的にも成功している傾向が見られた。

8.4　生活安定・自己実現型

「生活安定・自己実現型」は収入よりも自己実現のために通訳の仕事をしていると見なされる人たちを指す。転職以外のきっかけで 40 代以降に通訳者としてデビューした人は 31 人で、40 代のデビューが 23 人、50 代が 8 人だった。通訳者になりたいと思った年齢については無回答の 3 人を除く 28 人の平均が 36 歳、最年少が 11 歳、最高齢が 50 歳だった。これは「プロまっしぐら型」の平均 21 歳、「遠回り・プロ志向型」の 26 歳、「転職型」の 28 歳と比べるとかなり高い。

なりたいと思った年齢からデビューするまでの平均は 11 年で、最短が 1 年未満、最長が 40 年だった。1 年未満は 4 人、1 年が 1 人、2 年が 3 人、3 年が 2 人で、31 人中 5 人が 1 年以内、10 人が 3 年以内にデビューしている。通訳者になりたいと思うのが遅くても、すぐに仕事を見つけることは可能だと言える。もう一つの特徴は帰国子女が 1 人しかおらず、他の類型に比べて際立って低いことである。

生活安定・自己実現型のデビューした時期は図 8 のとおりである。1990 年代 4 人、2000 年代 15 人、2017 年までの 2010 年代 12 人で、1980 年代以前にデビューした人はいない。

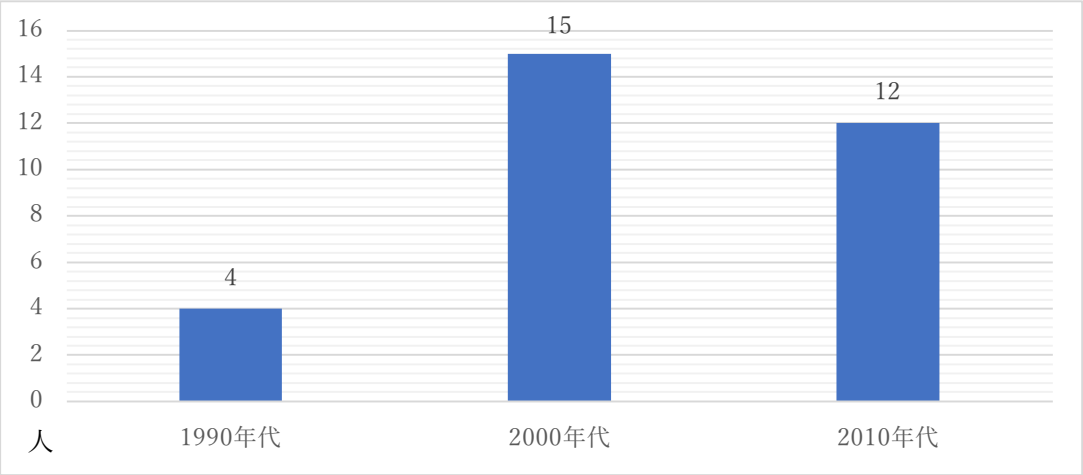

図 8. 生活安定・自己実現型のデビューした時期 （n=31）

主観的経済的自立については無回答の 1 人を除く 30 人中 21 人が自立していると感じていないと答えているが、5 年以内に自立したと感じている人も 4 人いる。就業形態については無回答の 1 人を除く 30 人中 8 人が通訳専業で、22 人は、通訳・語学学校、大学の教員、事務職を兼業している。「生活安定・自己実現型」の人たちの平均像は、通訳者になりたいと思った時期がかなり遅く、比較的長い時間をかけてデビューし、経済的自立を果たしていないと感じる人が多いと言える。

8.5 壮年転職型

「壮年転職型」は転職をきっかけに 50 代以上でデビューした人を指す。この人たちを「転職型」に含めなかったのは、50 代以降で転職をする人は退職後のセカンドキャリアを意識していると思われるからである。この類型にあてはまるのは 3 人で、デビュー年齢は 50 歳、53 歳、57 歳、通訳者になりたいと思った年齢は1人が 50 歳、他の 2 人は無回答だった。主観的経済的自立については 1 人が 5 年以内に経済的に自立したと感じたと答えたが、他の 2 人は経済的に自立していないと答えている。デビューした時期は 1 人が 2000 年、他の 2 人は 2014 年である。「通訳の道を志すきっかけ」として「帰国子女」を選んだ人はいなかった。「壮年転職型」に分類された人はわずか 3 人だったため、限られたデータから類型の特徴を見出すことはできなかった。しかし、人生 100 年時代の到来が取りざたされる中、定年退職した後のセカンドキャリアとしてフリーランスを目指す人が増えるとみられることから（プロフェッショナル&パラレルキャリア・フリーランス協会、2018）通訳者を目指す人たちの増加が予想される。この類型については、今後、多くのサンプルを集める調査・研究が必要である。

9. 5 つの類型の比較

5 つの類型を通訳者になりたいと思った年齢、デビュー年齢、帰国子女の比率、デビューまでの期間、主観的な経済的自立について比較する（表 1）。なお、各項目の有効回答数が一定ではないため、数値は厳密なものではなく、おおまかな傾向を示す手がかりと捉えた。

5 つの類型を比べると、通訳者になりたいと思った年齢とデビュー年齢が若い「プロまっしぐら型」はプロ通訳者としての経済的自立性が高い傾向を示した。その平均像は 21 歳で通訳者を志し、25 歳でデビューし、主観的な経済的自立の比率は 95 パーセントともっとも高い。帰国子女の比率も 33 パーセントと最も高く、若いころから国際交流の経験のある人が少なからず含まれていると思われる。

「遠回り・プロ志向型」の平均像は、26 歳で通訳者になりたいと思い、34 歳でデビューしている。その間に要した期間は「プロまっしぐら」型のほぼ 2 倍である。他に継続的で収入を伴う職業についていないことから、プロ通訳者を目指すものの、何らかの理由でなかなかデビューできなかった人が多いと見られる。ただし、3 年以内にデビューした人もおよそ 3 割いるので、個人差があるということだろう。

「転職型」の平均像は 28 歳で通訳者になりたいと思い、33 歳でデビューしている。なりたいと思ってからデビューするまでの期間は「プロまっしぐら型」と同様に短い。これは「転職型」は短期間で経済的自立をすることが欠かせないからだろう。転職を考えるときは、現在と同等の収入が得られるかどうかを考えるのが当然である。勤め先で通訳の経験を積むとか、通訳学校に通って実力をつけプロとしてやっていけるという見込みがあったので転職に踏み切れたと思われる。明確な目標を持ち、具体的な準備をすることがプロ通訳者としてのデビューを早め自立を助けると言えるだろう。

表 1　通訳者のキャリア形成プロセスの 5 つの類型

	プロまっしぐら型	遠回りプロ志向型	転職型	生活安定・自己実現型	壮年転職型
定義	転職ではなく 20 代までにデビュー	転職ではなく 30 代にデビュー	40 代までに転職でデビュー	転職ではなく 40 代にデビュー	50 代以降に転職でデビュー
人数	60 人	41 人	40 人	31 人	3 人
平均年齢	53 歳	50 歳	51 歳	56 歳	61 歳
通訳者になりたいと思った年齢	21 歳（n=56）	26 歳 (n=38)	28 歳（n=38）	36 歳（n=28）	50 歳 (n=1)
デビュー年齢	25 歳 (n=60)	34 歳 (n=41)	33 歳 (n=40)	47 歳 (n=31)	53 歳 (n=3)
きっかけ	転職以外	転職以外	転職	転職以外	転職
帰国子女の比率	33% (20 人)	22%（9 人）	20%（8 人）	3%（1 人）	0%（0 人）
デビューまでの期間	5 年 (n=51)	9 年 (n=35)	5 年 (n=37)	11 年 (n=28)	3 年 (n=1)
3 年以内のデビュー	45%（27 人）	29%（12 人）	53%（21 人）	32%（10 人）	33%（1 人）
1 年以内のデビュー	21%（12 人）	22% (9 人)	28% (11 人)	16% (5 人)	0% (0 人)
経済的自立ができていない	5%（3 人）	28%（11 人）	18%（7 人）	70%（21 人）)	67%（2 人）

「生活安定・自己実現型」は通訳になりたいと思った年齢もデビュー年齢も高く、通訳の収入で経済的に自立することが難しいという傾向がみられる。平均像は、継続的で収入を伴う職業についておらず、36 歳で通訳者になりたいと考え 47 歳でデビューしている。この類型に属する人たちは、同居家族に生計の担い手がおり、収入を得る必要に迫られていなかったと推察される。例えば専業主婦をしていた女性が、子育てが一段落したので以前から興味のあった通訳の勉強を始めたというようなケースが考えられる。なりたいと思ってからデビューするまでに平均で 11 年を要しているが、1 年未満でデビューしたのは 4 人、1 年が 1 人、2 年が 3 人、3 年が 2 人だった。すなわち、5 人が 1 年以内、10 人が 3 年以内にデビューしている。通訳の仕事で経済的に自立していると感じている人は全体の 30 パーセントに留まっているが、この類型はもともと収入を得るニーズが高くないと見られることから、経済的利得よりも自己実現を優先する姿勢が

ここに現れているのかもしれない。「生活安定・自己実現型」は 40 代以降にデビューしても仕事のチャンスはあり、経済的に自立する道もあるということを示している。

「壮年転職型」は今回の調査（新崎ほか, 2019b）ではわずか 3 人しかいなかったが、今後は社会の高齢化と勤労年齢の引き上げとともに、50 代以降に転職を理由として通訳者を目指す人が増えてくるかもしれない。デビュー年齢の平均は 53 歳だが、通訳者になりたいと思った年齢について回答した 1 人は 50 歳と記していることから、かなり短期間でデビューしたことになる。またこの人は通訳の仕事で経済的自立をしていると感じると答えている。

10. 考察

通訳者のキャリア形成をキャリアビジョンの視点から考えると、「プロまっしぐら型」と「転職型」は最初から比較的明確なビジョンをもっていたと思われる。それは通訳者になりたいと思ってからデビューするまでの期間が短いことに表れている。「遠回り・プロ志向型」はデビューまで長い期間を要していることから、必ずしも最初からビジョンが明確だったとは言えず、「生活安定・自己実現型」は、通訳をキャリアとして捉える時期がかなり遅いため、個人的なライフ・スペースでの経験を通じて徐々にビジョンが形作られたと考えられる。

本稿が準拠する調査（新崎ほか, 2019b）では回答者のおよそ 7 割がフリーランスであるため、企業や組織における終身雇用を想定したキャリア理論を適用するのは難しい。通訳者の道を志望した年齢が若く、明確なビジョンがある人がプロ通訳者として成功する傾向は見られるものの、最初から主体性と目的意識が鮮明でなくても、中高年になってから通訳者の道に入って継続的に収入を得ている人もいる。このことは、優れた通訳技術があるかどうかで評価される実力の世界であることを示している。このように多様な通訳者のキャリア形成については Mitchell, Levin, & Krumboltz (1999) の提唱した Planned Happenstance Theory （計画された偶然性理論）が適用できるかもしれない。これは「偶然の機会」がキャリア形成に重要な役割を演じるという考え方である。Mitchell *et al., op. cit.* は偶然の機会からチャンスを生み出すための 5 つの能力を提唱した [6]。

1. Curiosity: exploring new learning opportunities
   好奇心：新しい学習機会を探す
2. Persistence: exerting effort despite setbacks
   忍耐：挫折にもめげす努力を続ける
3. Flexibility: changing attitudes and circumstances
   柔軟性：態度や状況を変える
4. Optimism: viewing new opportunities as possible and attainable
   楽観性：新しいチャンスは可能で達成しうると思う
5. Risk Taking: taking action in the face of uncertain outcomes
   リスクを引き受ける：結果が見通せないときもやってみる

Krumboltz (2009) はこの理論に基づいて、キャリア・カウンセリングのための Happenstance Learning Theory を展開し、キャリア形成のための具体的な助言をしている。

本稿では通訳者のキャリア形成には 5 つの類型があることを示したが、各類型に属する通訳者が同じ道筋を通ってキャリアを形成したとは思えない。それぞれのライフ・スパンとライフ・スペースにおける様々な経験を通して「通訳」に出会い、興味を持ち、何らかのきっかけで明確なビジョンが生まれ、教育・訓練の機会を見出し、誰かの手助けで仕事の世話をしてもらうという大まかな流れが、個人に独特のタイミングや場所でできたと思われる。Mitchell, Levin, & Krumboltz (1999) が推奨する 5 つの能力の視点から各類型の特徴を分析し、そこに何らかの共通性を見出すことができれば、これから通訳者を目指す人たちにもっと具体的で有用な示唆を与えることができるだろう。

11. 結論

「日本における通訳者のキャリア開発プロセス実態調査」(新崎ほか, 2019b)のデータを基に日本における通訳者のキャリア形成を、5 つの類型に分けその特徴を検討した。通訳になりたいと思った時期が早い方がプロ通訳者として成功する傾向が強いことが示唆されたが、その時期にかかわらず、すべての類型で、通訳を継続的で収入を伴う職業とし主観的経済的自立を達成できた人がいることが確認された。

本稿は、調査のデータから帰納的な推論により通訳者のキャリア形成プロセスを類型化した。しかし、使用したデータ項目の中には、調査データを基に推定したものが含まれており、根拠としての確実性が高いとは言えない。また、転職がきっかけで通訳者になったか否かを、学業終了後の職業として通訳者を目指したかどうかの手がかりとしたことの適切さについては議論の余地がある。しかし、個人的なエピソードとして語られることの多い通訳者のキャリア形成の在り方を調査研究の結果に基づいて類型化したことには一定の教育的意義があると考える。今後は、さらに有効な調査手法を用いて通訳者のキャリア形成の諸相を探求し、キャリア理論と結びつけて通訳者に必要な能力の開発がライフ・スペースにおける個人の役割とどのように結びつくかという視点から研究を進めたい。

.....

【著者紹介】

新崎隆子(SHINZAKI Ryuko)神戸大学文学部卒業。青山学院大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了。博士(国際コミュニケーション)。会議・放送通訳者。単著に『通訳席から世界が見える』(筑摩書房)、共著に『英語スピーキングクリニック』(研究社)などがある。

【註】

1. 2 人は年齢を 60 代としたが 65 歳で計算した。
2. 32-33 歳と記されたものは 33 歳、18-19 歳は 19 歳、17-18 歳は 18 歳で、20 代と記されたものは 25 歳で計算した。
3. 筆者は、民間組織が主催した調査報告（新崎ほか, 2019b）の発表会に出席した調査協力者の子女から、自分も 5 歳ぐらいから通訳者になりたいと思うようになったというコメントを聞いた。
4. 17-18 歳と記されたものは 18 歳で計算した。
5. 32-33 歳と記されたものは 33 歳、20 代は 25 歳で計算した。
6. Mitchell, Levin, & Krumboltz (1999), p.118. 和訳は筆者による。

【引用文献】

Fraser, J. & Gold. M. (2001). 'Portfolio Workers': Autonomy and Control amongst Freelance Translators. *Work, Employment & Society*, 15 (4): 679-697.

Gentile, P. (2013). The Status of Conference Interpreters: A Global Survey into the Profession. *International Journal of Translation, 15:* 63-82.

Katan, D. (2009a). Translation Theory and Professional Practice: A Global Survey of the Great Divide. *Hermes - Journal of Language and Communication Studies, 42*: 111-153.

Katan, D. (2009b). Occupation or Profession: a survey of the translators' world. In Sela-Sheffy, R. & Shlesinger, M. (Eds.), *Translation and Interpreting Studies.* 4(2): 187-209.

Krumboltz, J. D. (2009). The Happenstance Learning Theory. *Journal of Career Assessment*: 17: 135-154.

Mitchell, K. E., Levin, A. S, and Krumboltz, J. D, (1999). Planned Happenstance: Constructing Unexpected Career Opportunities. *Journal of Counseling & Development,* 77 (2): 115-12.

Styles, M. (1982). *On Nursing: Toward a New Endowment.* St. Louis: Mosby Inc.

Sueda, K. (2014). *Negotiating Multiple Identities.* Singapore: Springer.

Super, D. E. (1980). A Life-span, Life-Space Approach to Career Development. *Journal of Vocational Behavior. 16:* 282-298.

荒木淳子・正木郁太郎・松下慶太・伊達洋駆 （2017）「企業で働く女性のキャリア展望に影響する職場要因の検討」『経営行動科学』 30 (1): 1-12.

プロフェッショナル&パラレルキャリア・フリーランス協会 （2018）『フリーランス白書 2018』 プロフェッショナル&パラレルキャリア・フリーランス協会

古畑仁一 （2012）「キャリア形成、2 つのタイプについて考える」『Career Resource Laboratory』慶應義塾大学 SFC 研究所

羽田野慶子 （2007）「女性のキャリア形成に関する調査研究」『国立女性教育会館研究ジャーナル』 11: 103-112.

細萱伸子・新井範子・竹内（野木森）明日香 （2017）「女性のグローバルキャリア形成に関する意

思決定とジョブ・サーチ行動」『上智経済論集』62 (1・2): 45-63.
日本政策金融公庫総合研究所（2018）『フリーランスの実態に関する調査』 日本政策金融公庫総合研究所
新崎隆子・石黒弓美子・板谷初子・北間砂織・西畑香里 （2019a）「キャリア形成に関する通訳者の認識」『通訳翻訳研究』 19:1-22.
新崎隆子・石黒弓美子・板谷初子・北間砂織・西畑香里 （2019b）「日本における通訳者のキャリア開発プロセスに関する実態調査」『通訳翻訳研究』 19:115-136.
総務省（1997）『日本標準職業分類の一般原則』 総務省
武石恵美子 （2016）『キャリア開発論』 中央経済社
脇坂明 (1993)『職場類型と女性のキャリア形成増補版』 お茶の水書房

研究

Walden の邦訳比較：情報構造の視点から

Information Structure of Japanese Translations of *Walden*

水野　的

This article analyzes 18 Japanese translations of Henry David Thoreau's Walden: or, Life in the Woods from the perspective of information and discourse structure. Result shows that almost all the translations pay little attention to the information structure of the original and produce hard to read renditions, though not unintelligible, suggesting the strength of the translation norm of so-called 'chokuyaku' (literal translation) or 'yakushiage' (translation from backward); translation strategies that try to reproduce grammatical structures of the original as close as possible, with the result of distorting information structure of the source text. Diachronic analyses suggest there have been little improvement of translations since Meiji period.

本稿では Henry David Thoreau の *Walden* の邦訳を素材にして、談話構造と情報構造の視点から通時的な翻訳比較を行う[i]。この比較の基本には二つの想定がある。一つは日本における英語からの翻訳の規範は「直訳」と「意訳」とか、『日本の翻訳論』(2010)で述べたような「起点言語重視」と「目標言語重視」というような極ではなく、むしろ「訳し上げ」と「順送り」の訳という二つの極をめぐって展開してきたのではないか、という想定である。そして、二つ目は、二つの訳出方法のうち「訳し上げ」の規範力が圧倒的に大きいという想定である。（この二つの想定については幕末から現在までの資料によりある程度確認できているが、ここで詳しく述べることはできないので、さしあたり拙稿「柳父翻訳学の可能性」(2019)[*]を参照していただきたい。）

情報構造は形式として現れながら、同時にその形式が意味を含んでいる。だから、翻訳が原文の意味を再現しようとするのであれば、当然情報構造も考慮に入れなければならないはずである。二つの対立する規範のうち、「順送りの訳」は情報構造と密接に関連し、情報構造を反映していることが多い。他方、「訳し上げ」は欧文訓読の伝統に連なり、文法構造を訳文に反映させようとする。情報構造を反映することはほとんどないため理解が損なわれ、意味は歪曲される。

Henry David Thoreau の *Walden: or, Life in the Woods* (1854) は明治以来日本人に長く愛読されてきた作品であり、把握しているだけでこれまで 18 種類ほどの翻訳がある（以下のリスト参照）。「ほ

[*] http://jaits.web.fc2.com/precon_2019.pdf なお配布資料は http://jaits.web.fc2.com/Handout.pdf で見ることができる。

ど」というのはこれですべてとはいいきれないからである。荻野訳（『人生論』）のように、それとはわからないようなタイトルで出版されているものがまだあるかもしれない。しかし主要なものはカバーできているのではないかと思う。（リストにあるものの中には全訳でないものもある。18 の柴田は冒頭部分だけである。）

Walden 邦訳リスト（インデントしてあるものは後に発行形態を変えたものである。）

1. 水島耕一郎（訳）(1911 M44)『森林生活』（成光館書店）
   水島耕一郎（訳）(1933 S8)『哲人の森林生活』（南天堂出版部）
2. 今井嘉雄（訳）(1925 T14)『森の生活』（新潮社）（今井規清と同一人物と思われる。）
   今井嘉雄（訳）(1934 S9)『森の生活』（新潮文庫））
   今井規清（訳）(1948 S23)『森の生活』（大泉書店）
3. 古館清太郎（訳）(1930 S5)『ウオルデン』（『世界大思想全集第 32 巻』）（春秋社）
   古館清太郎（訳）(1933 S8)『森の生活』（春秋社　春秋文庫）
4. 酒井賢（訳）(1948 S23)『ウォルデン池畔にて』（養徳社）
5. 荻野樹（訳）(1948 S23)『人生論』（萬里閣）
6. 岡本通（訳注）(1949 S24)『Walden (Helix Library 5)』（筑紫書房）
7. 宮西豊逸（訳）(1950 S25)『森の生活（世界思想選書）』（三笠書房）
8. 神吉三郎（訳）(1951 S26)『森の生活—ウォールデン』（岩波文庫）
9. 富田彬（訳）(1953 S 28)『森の生活—ウォールデン』（角川文庫）
10. 出水春三（訳注）(1957 S32)『森の生活—ウォールデン』（南雲堂）
11. 真崎義博（訳）(1981 S56)『新訳・森の生活—ウォールデン』（JICC 出版局）
    真崎義博（訳）(1998 H10)『森の生活—ウォールデン』（宝島社文庫）
12. 神原栄一（訳）(1983 S58))『森の生活』（荒竹出版）
13. 岩城久哲（訳注）(1983 S58)『ウォールデン』（大学書林）
14. 佐渡谷重信（訳）(1991 H3)『森の生活—ウォールデン』（講談社学術文庫）
15. 飯田実（訳）(199 5H7)『森の生活—ウォールデン』（上下）（岩波文庫）
16. 酒本雅之（訳）(2000 H12)『ウォールデン—森で生きる』（ちくま学芸文庫）
17. 今泉吉晴（訳）(2004 H16)『ウォールデン—森の生活』（小学館）
    今泉吉晴（訳）(2016 H28)『ウォールデン　森の生活』（上下）（小学館文庫）
18. 柴田元幸（編・訳）(2013 H25)『書き出し「世界文学全集」』（河出書房新社）

1. Economy

まず冒頭のEconomyの章の第2パラグラフからの一節である。文脈がわかりやすいように前後の文章もつけてある。なお、酒井賢（訳）、岡本通（訳注）、出水春三（訳注）はこのEconomyの章を訳していない。柴田元幸（編・訳）はこの部分を含む冒頭の一節だけ訳している。

When I wrote the following pages, or rather the bulk of them, I lived alone, in the woods, a mile from any neighbor, in a house which I had built myself, on the shore of Walden Pond, in Concord, Massachusetts, and earned my living by the labor of my hands only. I lived there two years and two months. At present I am a sojourner in civilized life again.

I should not obtrude my affairs so much on the notice of my readers if very particular inquiries had not been made by my townsmen concerning my mode of life, which some would call impertinent, though they do not appear to me at all impertinent, but, considering the circumstances, very natural and pertinent. Some have asked what I got to eat; if I did not feel lonesome; if I was not afraid; and the like. Others have been curious to learn what portion of my income I devoted to charitable purposes; and some, who have large families, how many poor children I maintained. I will therefore ask those of my readers who feel no particular interest in me to pardon me if I undertake to answer some of these questions in this book.

この部分の情報構造は新旧情報の面から見ると次のようになっている。（なおT-RはTheme-Rhemeであるが、情報構造の概念の中でもこのTheme-Rhemeは、長文の場合には再帰構造を工夫してそれぞれに重要性に従ってウェイトをつけない限り使い物にならない。同様に新旧情報の概念も、この例のようにより大きな談話構造を考慮に入れないと正確さに欠けるという限界がある。）以下に簡単な構文解析と情報構造分析図を示す。

I should not obtrude my affairs so much on the notice of my readers — T - R
Given (Inferable)

if very particular inquiries had not been made by my townsmen — sT/tT - R
concerning my mode of life,
NEW

[which some would call impertinent, — sT/t T- R
NEW

though they do not appear to me at all impertinent, — sT/tT - R
Given NEW

but, considering the circumstances, very natural and pertinent.] — sT/tT- R
NEW

（TはTheme, RはRheme, sTはstructural Theme, tTはtopical Themeを示す。）

この節の展開はある程度は予想できる。主節(I should not obtrude my affairs so much on the notice of my readers)だけでは文が完結しない感じを与えるから、読者はその後に何らかの条件付け、制約が来るだろうと予想するだろう。この条件、制約は新情報である。あるいは Chafe (1984)の言うような

主節と副詞節がpunctuation unitで区切られていないケースと考えてもよい。その場合、情報はfamiliar なもの（旧情報）から unfamiliar なもの（新情報）へと流れる。主節は前のパラグラフの冒頭にある”When I wrote the following pages”に関連していると推定できる(inferable)のでfamiliarな情報である。if 節は unfamiliar な情報であるから主節よりも際立ちを持つ。したがって翻訳もそのような情報構造を維持するのが望ましい。いいかえればif節からの訳し上げは避けるべきであるということになる。さらに、主節と従属節の訳出の順序を逆にすると、”very particular inquiries”と”which some would call impertinent”との結束性も弱まってしまうからである。

次の関係詞節以降は次々と新情報を付け加えていく形である。”which some would call impertinent”のThemeはwhich = very particular inquiriesで、それに新情報であるRhemeが続く（この関係詞節が新情報になる理由は次節で詳しく説明する）。”though they do not appear to me at all impertinent”は、構造的Theme (though) に話題的Theme (they)、そして新情報であるRhemeが続く。最後の短縮節”but, considering the circumstances, very natural and pertinent”は直前のRhemeの続きである。(they are) very natural and pertinent. したがって筆者の試訳は次のようになる。

（試訳）
「私は自分の事情を押しつけがましく読者に話そうというつもりはなかったのだが、（自分のことで読者を煩わせたくはなかったのだが）、ただ町の人から私の生活の仕方についてかなり具体的な質問があったのだ。そんな質問をするのはぶしつけだと言う人もいるかもしれないが、私には全然ぶしつけとは思えない。状況を考えれば当然でもっともなことに思える。」

上に述べたような視点から既訳を検討する。

水島耕一郎訳 (1911 M44)『森林生活』（成光館書店）
◎余が殊更らに、我事を述べて、読者の注意を累（わずらは）すに至つた次第は他に非ず、我郷人等余に向つて当時の生活方法に関し、極めて立入つた質問をなしたからである、<u>中には此生活方法を、不穏当と</u>評した者があるかも知れぬが、余は決して不穏当とは思はない、却つて事情を考ふれば、甚だ自然的で、且つ穏当である。(1-2)

第一文は情報構造を維持した順送りの訳になっているが、下線部はmy mode of lifeがimpertinentであると取り違えている。my mode of lifeは単数形だが、”which some would call impertinent, though <u>they</u> do not appear to me at all impertinent”からわかるように、whichの先行詞は複数形であることが示されているのだから間違いようがないと思うのだが。この部分を正しく解釈したのは15人の翻訳者のうち6人のみであった。

古館清太郎（訳）(1930 S5)『ウオルデン』（『世界大思想全集第 32 巻』）（春秋社）
若し町の人達が、私のやつた生活法に就て、特別に詳細な質問をしなかつたなら、私は殊更、自分

のことで読者の注意を煩はすやうなことをしなかつたであらう。私のやつた生活法を適切でないと云ふ人があるが、私にとつては適切でないどころか、周囲の事情を考へると極めて自然的で、適切である。(3)

下線を付した部分は訳し上げのために新旧情報が逆転している。また古館は水島同様、「適切でない」のは「生活法」であると捉えている。

今井規清（訳）(1948 S23)『森の生活』（大泉書店）
若し町の人々が私に向つて、其の当時の私の生活方法に就いて、極めて詳しい質問をしなかつたならば、私は殊更に自分の事を述べて、読者の注意を煩はす様なことは為なかつたであろう。或る人々は此の生活方法を不適当だと云ふかも知れないが、私は決して不適当だとは思はない。否、事情を考へてみると、それは非常に自然的で、且つ適当なものである。(19)

今井訳も基本的には古舘訳と同じで、新旧情報の逆転があり、誤訳も同じである。

荻野樹（訳）(1948 S23)『人生論』（萬里閣）
私がしてきた生活方法について、町の人々が特別の関心を寄せなかつたら、私は自身のことで、読者の注意を煩はすことはなかつたであらう。ある人は、私のとつた生活方法が適切でないといふが、それは私にとつて適切でないどころか、極めて自然で適切であつたのである。(3)

第一文は訳し上げになっており、第二文はやはり誤訳である。

宮西豊逸(1950) 『森の生活（世界思想選書第15）』（三笠書房）
私が自分の生き方について、町の人たちから根堀り葉掘り訊かれなければ、こんなに自分の私事を推しつけがましく発表はしなかつたろう。私の生き方は穏当ではない、と町の人たちはいう。けれども私には、ちつとも不穏当ではなく、実情を考えれば、きわめて自然であり、穏当に思える。 (2)

最初の文は訳し上げで、主節と従属節の節順が逆転している。「訳者後記」に「本書の飜譯に際しては、いつもながら、富田彬先生の御教示を忝うした」とある。しかし、宮西訳は誤訳を含め、今井訳、古舘訳と同じである。

神吉三郎（訳）(1951 S26)『森の生活—ウォールデン』（岩波文庫）
もしわたしの生活ぶりについて町の人たちが御念の入った詮索だてをしなかったならば、わたしは自分一個のことを読者諸君の注意に押し付けるようなことはしないだろう。一部の人はわたしのしたことをことさら奇をこのむものであるというかもしれないが、わたしとしては当時の事情に照らして極めて自然であり、素直なことであったと思えるのである。(17)

神吉訳も宮西訳のパターンを踏襲しているが、impertinentを「ことさら奇をこのむもの」とするのには無理がある。

富田彬(1953)『森の生活（ウォールデン）』（角川文庫）
もし私の町の人達が、私の生活法のことを根ほり葉ほりきかなかったなら、私はなにもこれほど押しつけがましく、自分の私事を読者諸君に読んでもらおうとはせぬだろう。そんなに根ほり葉ほりきくのは失敬じゃないかと言う人もあるだろうが、私は失敬どころか、実情を考えれば、至極自然で適切に思える。(5)

富田に至って初めて”some would call impertinent”が正しく解釈される。しかし富田訳も最初の文の情報構造は逆転している。

真崎義博（訳）(1981)『新訳・森の生活—ウォールデン』（JICC出版局）
町の人たちがぼくの生活ぶりをあれほど調べたりしなければ、ぼく個人のことを本にして、人々の目にとまるようになどしなかっただろう。そういう町の人を失礼だという人がいるかもしれないけれど、ぼくにはぜんぜん失礼だとは思えなかった。周囲の状況を考えれば、むしろとても自然で、あたりまえのことにさえ思えたのだ。(1)

真崎訳は富田訳と同様、some would call impertinentの解釈は正しいが、最初の文の情報構造が逆転している。

神原栄一（訳）(1983)『森の生活』（荒竹出版）
もし町の人たちが私の暮らしぶりについてこと細かな詮索をしなかったら、私も読者のみなさんに自分の個人的な事柄を押しつけるようなことはしないだろう。私の生活ぶりを、ことさらに奇をてらうものと言う人もいるだろう。だが、私にしてみればまったくそんなことではなく、当時の事情を考えればきわめて自然で素直なことであったように思われるのだ。(3)

神原訳は宮西訳に逆戻りしている。

佐渡谷重信訳(1991)『森の生活 ウォールデン』（講談社学術文庫）
もし町の人々が私の生活ぶりを根ほり葉ほり尋ねたりしなかったら、私は自分のしたことを読者に押しつけがましく語ることはなかっただろう。町の人のなかには無礼ではないかと言う人もいるが、そのような質問は私にとって無礼どころか、当時の社会の実情を考えれば、ごく自然で、当然のことのように思える。(13)

基本的に富田訳、真崎訳と同様である。

飯田実（訳）(1995)『森の生活―ウォールデン（上）』（岩波文庫）
町のひとびとから、そのときの暮らしぶりについていろいろとこまかい質問を受けなかったならば、私は個人的な出来事を読者のみなさんの目に、これほど押しつけがましくさらすようなことはしかなっただろう。そんな質問をするのは失礼だというひともいるであろうが、私は全然失礼とは思わないし、さまざまな事情を考えあわせてみると、きわめて自然で当然のなりゆきであった。(9)
飯田訳も富田訳、真崎訳、佐渡谷訳と同様である。

酒本雅之（訳）(2000)『ウォールデン―森で生きる』（ちくま学芸文庫）
本来ならわたくしごとを、こうまで読者に押しつけがましく語るべきではないのだが、何しろ町の人びとがぼくの暮らしぶりを、根ほり葉ほり聞きたがった。不作法な連中だと言う人もいるだろうが、少なくともぼくには不作法などとはとうてい思えず、むしろ事情を考えればごくもっともで、自然なことだと思えるのだ。(7)

酒本訳は第一文の情報構造を再現し、some would call impertinentも正しく解釈している。

今泉吉晴（訳）(2004/2016)『ウォールデン―森の生活（上）』（小学館文庫）
森で暮らしている間に、町の人から生き方をいろいろ問われなかったら、私はこの本で自分の考えを事細かに明かして、読者に訴える気にはならなかったでしょう。友人の中には、町の人が私に立ち入ったことを問うのは失礼だ、と言う人もいますが、私は彼らが礼を失していたとは思いません。生活環境を考えれば、ごく自然な気持ちの表れで、礼にもかなっています。(8)

富田訳、真崎訳、佐渡谷訳、飯田訳と同じパターンであるが、やや冗長な訳である。

柴田元幸（編・訳）(2013)『書き出し「世界文学全集」』（河出書房新社）
私としても、人によっては不適切と呼ぶようだが私には少しも不適切には思えず状況を考えるならむしろきわめて自然で適切と思える私の暮らし方に関し、同じ町に住む人たちからきわめて具体的な問いをあれこれ突きつけられたりしなかったら、ここまで自分のことを読者に押しつけはしないだろう。

最も新しい訳にもかかわらず、下線部の解釈を誤り、二つの文を合体させた訳文全体は大きな訳し上げになっており、かつ読みにくい。

2. Where I Lived, and What I Lived For

「朝」をテーマとした一節である。なお岡本通（訳注）(1949 S24)『Walden (Helix Library 5)』（筑紫書房）は、この章のごく一部しか訳しておらず、該当箇所は訳していない。

The morning, which is the most memorable season of the day, is the awakening hour. Then there is least somnolence in us; and for an hour, at least, some part of us awakes which slumbers all the rest of the day and night. Little is to be expected of that day, if it can be called a day, to which we are not awakened by our Genius, but by the mechanical nudgings of some servitor, are not awakened by our own newly-acquired force and aspirations from within, accompanied by the undulations of celestial music, instead of factory bells, and a fragrance filling the air—to a higher life than we fell asleep from; and thus the darkness bear its fruit, and prove itself to be good, no less than the light.

かんたんな構文解析図を示す。（関係代名詞の前にハイフンがついているものは、制限用法であることを示す。）

The morning, (which is the most memorable season of the day,) is the awakening hour.
Then there is least somnolence in us;
and for an hour, at least, some part of us awakes
[-which slumbers all the rest of the day and night].
Little is to be expected of that day,
[if it can be called a day,]
[-to which we are not awakened by our Genius,
but by the mechanical nudgings of some servitor,
are not awakened by our own newly-acquired force and aspirations from within,
accompanied by the undulations of celestial music, instead of factory bells,
and a fragrance filling the air—to a higher life than we fell asleep from;]
and thus the darkness bear its fruit,
and prove itself to be good, no less than the light.

ここには三つの関係詞節がある。以下の記述を理解してもらうために、はじめに関係詞節の情報構造についてごくかんたんに説明しておこう。関係詞節は一般に、制限的関係詞節と非制限的関係詞節に分けられる。情報構造の面からいうと制限的関係詞節は「前提」(presupposition)であるとされる。前提とは、文が発話された時に話し手が、聞き手がすでに知っているか、当然と考えるような一連の命題である。非制限的関係詞節は、聞き手が文を聞いた結果として新しく知ることになる情報を与える。そのため、非制限的関係詞節の内容は、前提とならず、「断定」(assertion)されると言われる(Lambrecht, 1994)。要するに、制限的関係詞節は旧情報を与え、非制限的関係詞節は新情報を与える、と理解しておけばよい。しかしこれだけであれば、ここから出てくる翻訳手法は、制限的関係節は訳し上げ、非制限的関係詞節は順送りするということにしかならない。

ところが制限的関係詞節の中には「前提」ではないものも多く存在する。それは Bernardo (1979) が「情報追加型」(informative)と呼ぶもので、叙述的な独立節と同じように名詞句（先行詞）について

断定する関係詞節である。たとえば、And they come across his hat that he neglected to pick up.の場合、先行詞 hat は既知であるが、関係詞節はその帽子に関する聞き手の知識に新しい情報を付け加える(この場合は、自転車に乗った少年が帽子を拾い上げるのを忘れたことである)。また、不定関係詞節(先行詞が不定名詞の関係詞節)は、前提ではなく、断定される新情報である(安井1978:210; 田中・村上 1995:19-20)。たとえば、I saw a dress which under no circumstance would I have bought. (服を一着見たが、とても買う気になれなかった)のようなものである。

さて、例文の"some part of us awakes which slumbers all the rest of the day and night"は不定関係詞節(しかも関係詞節が外置されている)であり、"that day, if it can be called a day, to which we are not awakened by our Genius..."は(関係詞節を予想する)後方照応の形容詞thatがついた先行詞を持つから、to which以下は新情報を付け加える「情報追加型」の関係詞節といってよい。また、関係詞節が外置されているため、主節とは別の情報構造を持ち、際立ちが与えられて前景となり、主節の方は背景となる(女鹿2009)。したがって、このような関係詞節の訳は、訳し上げではない手法が要請される。なお、"Little is expected of that day..."の文は、that dayに関係詞節と"accompanied..."の短縮節が続き、最後にthus...以下の2つの文が付加される。情報構造の面から言えば伝達の中心は"to which"関係詞節以下になる。

もう一つ問題がある。ソローはこの箇所で一貫して「朝」を大きなテーマにしており、談話の流れは、「朝は目覚めの時」と導入し、「一日を意義あるものにするためには望ましくない目覚め方」を説明して、"thus the darkness bear its fruit..."とつないでいる。この続き方は表面的にはおかしいので、多くの邦訳がうまく処理できていない。つまり、「一日を意義あるものにするためには望ましくない目覚め方」を述べることで、逆に「望ましい目覚め方」を表現しているのであるが、「…のような朝には期待できない→こうすれば闇は実を結び」というように、意味とシンタックスにねじれがある。ここは、以下の試訳のように、いわば「裏から訳す」ようにすれば、意味的整合性(coherence)が保証され、同時に、訳し上げずに原文の流れに沿った訳も可能になる。なお後続の文は、That man who does not believe that each day contains an earlier, more sacred, and auroral hour than he has yet profaned, has despaired of life, and is pursuing a descending and darkening way.である。

(試訳)

「朝、それは一日のうちで最もすばらしい時間であり、目覚めの時である。眠気はすっかり消え去り、少なくとも一時間は、体のある部分が目覚めている。それは日中の他の時間や夜の間は眠っているのだ。だから、そんな一日から何かを期待するためには—いやしくも一日と呼べるのであれば—われわれは自分の自然な能力によって目覚めなければならず、召使いに何度もつつかれて起きるのであってはならない。そしてまた、自分が新たに得た内部からの力と意欲によって目覚めなければならず、工場の始業のベルではなく、波打つようなすばらしい音楽と大気を満たす芳香にともなわれながら、眠りについた時よりも高次な生へと目覚めなければならない。かくしてこそ夜の闇にも意味があり、光と同じように良きものであることがわかるのである。」

以下、既存の訳を見ていく。

水島耕一郎（訳）(1911 M44)『森林生活』（成光館書店）

一日の中で最も記憶に値する時期は、醒覚をなすところの時間である。此時、吾人は殆んど半眠半醒と云状態がない。而して少くとも此一時間の間は昼夜とも其外の時間には昏睡を続けてゐるところのある性質が覚醒してゐる。抑々吾人が自分の霊能に眼を醒されずして、纔かに附添人の肘に小突かれなどして眼を醒ましたり、又、自分が新に得た気力や、精神内部からの抱負や、之に伴ふて起る神聖なる音楽の波動、乃至空中の妙香の依つて眼を醒さずして、就業を報ずる工場のベルなどに呼醒された其一日と云ふものは、之を日と云つて可いかどうか解らぬが、假りに日と言つた所で、極めて頼母しくない一日である。真に覚醒するにに(ママ)おいては、其眠る前に経験した生活よりも、更に一層高尚なる生活に入る。この故に、闇にも其結実がある。闇も光と同じく貴いのである。(183-184)（ルビにカギかっこがあるものは筆者による。）

長大な訳し上げがある。波線部は、最後の主節部分との意味的整合性を作るために前の文からむりやり独立させている。

古館清太郎（訳）(1930 S5)『ウオルデン』（『世界大思想全集第 32 巻』）（春秋社）

一日中で、最も記憶すべき時である朝は、覚醒の時間である。で、吾々は、ぼんやりしてゐるやうなことは殆どない。少くとも朝の一時間は、他の昼や夜の時間には、うとうとしてゐるやうなものも覚醒してゐる。吾々は、自分達自身の霊性に眼を覚まされないで、傍らにゐる人の肘で機械的に突つかれて眼を覚ましたり、又自分達が新たに得た気力や、内部から湧き起る抱負や、それに伴奏する神聖な音楽の波動などに依つて眼を覚まされないで、工場の笛で呼び起こされたりするやうな日は、それが日と云はれるにしても、そんな日に期待は持てないが、朝の空には、――前夜眠つた時よりも高い生活に導く――薫香が満ちてゐる。かうして闇も実を結ぶので、随つて闇も光と同じく貴重なものである。(73)

これも長大な訳し上げがある。また「朝の空には、――前夜眠つた時よりも高い生活に導く――薫香が満ちてゐる」は、続く"and thus..."との整合性を確保するための苦肉の策であるが、かえって意味がずれてしまっている。

今井規清（訳）(1948 S23)『森の生活』（大泉書店）

朝と云ふ、一日中でも最も記憶すべき時間は、即ち覚醒をする時間である。故に朝は、吾々は殆んど夢幻の状態に居るやうな事はない。そして少くとも朝の一時間の間には、昼夜の他の時間には昏睡に在る性質すらも覚醒してゐる。吾々は、我々自身の霊性に眼を覚まされないで、傍にゐる人の肘で突かれなどして眼を覚ましたり、又吾々が新たに得たる気力や、精神の内部からの抱負や、そして其れとともに起る神聖なる音楽の波動に依つて眼を覚まさずして、工場の笛などで呼び起され

た一日は、これを日と云ふ可きかどうかは兎に角、假りに日と云つても、そんな日には大した期待を持つことが出来ないのである。—吾々は真に目覚めたときには、其の眠る前よりも、一層高尚なる生活に達して居るべきである。斯の如くにして闇はその實を結ぶのであつて、闇も光と同じ様に貴重なものである。(126-127)

今井訳にも長い訳し上げがあり、「吾々は真に目覚めたときには、其の眠る前よりも、一層高尚なる生活に達して居るべきである」の部分は意味的なつながりを回復するための方策であるが、意味がずれてしまっている。

酒井賢（訳）(1948 S23)『ウォルデン池畔にて』（養徳社）
朝は一日ぢうでも最も記憶すべきときであり、じつに目ざめのときなのである。このときには睡たい気もちは殆んどない。そして、すくなくとも朝のひとときは、夜昼の別がなく始終眠つてゐる部分だつて、目ざめるのだ。私たち自身の霊性に目を覚まされないで、かたはらにゐる人に肘でこつこつ突かれて目をさますやうな一日とか、私が新たに得た気力や、身内にこみあげてくる抱負や、それに伴奏する天上の音楽の波動や—工場のベルなどではない—虚空に一杯になつたいい匂ひなどで、前の晩眠りについたときより一段と高い生活へ覚めてゆかないやうな一日は、かりにそれが日といはれるにしたつて、大した期待のもてない一日である。こんなわけで、はじめて、闇も実を結ぶのであつて、闇も光とおなじやうに結構なものとなるのだ。(143-144)

これも長い訳し上げである。忠実に訳したために、最後の文は前文との意味的整合性を失っている。

荻野樹（訳）(1948 S23)『人生論』（萬里閣）
一日中で、最も記憶すべき時である朝は、覚醒の時間である。だから、我々は、ほんやりしてゐるやうなことはほとんどない。そして少くとも朝の一時間は、昼夜の他の時間には、うとうとしてゐるやうなものも覚醒している。我々は、我々自身の霊性に眼を覚まされないで、傍にゐる人の肘で突つかれて眼を覚ましたり、我々が新たに得た気力や、内部から沸き起こる抱負や、そしてそれとともに起る神聖な音楽の波動に依つて眼を覚まされないで、工場の笛などで呼び起こされたりするやうな日は、それが日といはれるにしても、そんな日にたいした期待は持てないが、朝の空には、——前夜眠つた時よりも高い生活に導く——薫香が充ちてゐる。かうして闇はその実を結ぶのであつて、闇も光と同じく貴重なものである。(114-115)

下線部の訳し上げの度合いが大きい。「朝の空には…」以下は古館訳と同じ処理をしている。

宮西豊逸（訳）(1950 S25)『森の生活（世界思想選書）』（三笠書房）
朝は一日の最も画期的季節、目覚めの時だ。このとき人間の内部には睡気が一ばん少ない。そして少くとも一時間は、その時の外は昼夜を通じて睡りつづけている人間の或る部分が目覚める。自らの

天賦の才能によつて目覚めさせられない日は、それが一日と呼ばれ得るとしても、期待されるところは殆んど無い。召使あたりに機械的に突つかれて目覚めたりするのは、自分自身の新しく把握した精力と内部からの翹望によつて、目覚めさせられるのではない。工場のベルではなく、天界の音楽の旋律に伴奏されて、大空に満つる芳香と共に—寝入つた時よりも更に高い生活へ目覚めるべきだ。このようにして闇は果実を結び、光と等しく、それが美なる事を示すのだ。(67-68)

個別の訳語は別にして、分節化によって訳し上げによる負荷を小さくしようとした訳になっている。「裏」から訳すことによって、最後の文との意味的整合性は確保されている。

神吉三郎（訳）(1951 S26)『森の生活—ウォールデン』（岩波文庫）
一日のうち最も記憶すべき時である朝は目ざめの時である。このとき、われわれのうちに眠気は最もすくない。少なくとも一時間は、そのほかの時は夜昼眠っているわれわれのうちのある部分も目ざめる。だれか召使などの器械的なゆり動かしによってでなく、われわれの守護神によって目ざまされ、工場のベルではなく天体のかなでる音楽の波動と大気をみたす香りとによって伴なわれて、われわれ自身の新たに獲られた活力と内からの志望とによって、前の晩にそれから眼をとじたより一層高い生活へと目ざまされる—そうあってこそ夜の闇は成果をむすび光りにおとらず善いものであることがわかるのである—そういうのでない一日（それが一日というにあたいするとして）からは多くは期待できない。(123)

訳し上げである。'Little is to be expected of that day'の訳が最後になっており、情報構造が大きく変化している。これもまた、最後の文との意味的整合性を確保しようという努力の反映である。

富田彬（訳）(1953 S 28)『森の生活—ウォールデン』（角川文庫）
一日のうちで最も記憶すべき時である朝は、覚醒の時間である。いちばん眠気のすくない時である。すくなくとも一時間は、朝以外の昼間と夜の間眠っているわれわれのある部分も眼をさましている。われわれの守護神に起されずに、召使などに機械的にこづかれてやっと起きたり、あるいは高くあるいは低く鳴る天上の楽の音と空中をみたす香気に伴われて、われわれ自身の新たに得た力と内からの熱望によって起されて、われわれが眠った時の人生よりもいっそう高い人生に眼ざめるのでなく、—それでこそ暗黒はその実をむすび、光と同じように、善いものであることを証拠だてるのであるが—工場の鐘の音で眼をさますような一日には、それでも一日は一日だと言えるにしても、あまり期待はかけられない。(101)

訳し上げる必要のない次の文まで訳し上げて何とか意味を一貫させようとしているが成功しているとは言い難い。神吉訳と同様、'Little is to be expected of that day'の訳が最後になっている。

出水春三（訳注）(1957)『森の生活（ウォールデン）Phoenix Library』（南雲堂）
朝は一日のもっとも重大な時で、目をさます時間なのだ。人に眠気の一番すくないのはその時だ。少なくとも一時間は、日夜ずっと惰眠を貪る人間の一部分が目をさます。人がその天性に呼びおこされず、従僕の肘で機械的にこづかれて目ざめるような一日には、期待のかけようもないのである。工場のベルの代りに、天上のたえなる音楽と空中に満ちわたる芳しい香りを伴なって、新たに得た自己の力と内部から湧く抱負によって目ざまされ、前夜眠った時よりも高い生活に目ざめ、こうして闇も実をむすんで光りに劣らぬ価値を示すようにならない一日には、期待を寄せることはできないのだ。いや、それを一日と呼べるかどうか、あやしいものだが。(17)*

出光訳は、”Little is expected”を「期待のかけようもない」、「期待を寄せることはできない」と 2 回に分けて訳すことで、訳し上げの負荷を減らそうとしており、順送りへの志向性が見られるが、下線部は訳し上げである。意味的整合性を実現するために「こうして闇も実をむすんで光りに劣らぬ価値を示すようにならない一日」としたために、”if it can be called a day”の訳が最後に来ており、この長いセンテンスの焦点である”and thus the darkness bear its fruit, and prove itself to be good, no less than the light”の部分が焦点化されていない。

真崎義博（訳）(1981)『新訳・森の生活—ウォールデン』（本山賢司 絵）（JICC 出版局）
一日のうちでもいちばんだいじな朝というのは、目覚めの時だ。この時がぼくらのなかの眠気がいちばん少なくなる。そして、少なくとも一時間は、夜眠っている部分も目覚めるのだ。もし自分の守護神によってでなく従者に機械的にゆり動かされて目を覚ますのだとしたら、また、工場のサイレンでなく、天上の音楽のうねりと大気を満たすいい香りとに伴われて新たに得た力や内部からの熱っぽい願望によって、前の晩に目を閉じたときよりも高い生活へと目覚めるのでなければ、つまり、闇がその実をむすび、光にまけないくらい良いものだということを示さなければ、そこから始まる一日（それを一日と呼ぶに値するなら）に多くを期待することはできないのだ。(68)

訳し上げであり、情報構造が大きく変化している。波線部は意味的一貫性を作るために苦労している様子がうかがえる。

岩城久哲（訳注）(1983)『ウォールデン』（大学書林）
1 日の中で、もっとも記憶すべき時である朝は、目ざめの時である。この時は、我々の中にもっとも眠けがすくない。少くとも 1 時間は、1 日の他の時間は眠っている我々の他の部分が目ざめている。守護神によってではなく、誰か従僕の機械的ゆり動かしによって目ざめ、工場のベルのかわりに天上の音楽の波動や大気をいっぱいにする香りに伴なわれて、我々の内から新らしく得た活力と願望によっ

* この箇所には次のような訳註がついている。undulations「波動」「振動」 the darkness bear its fruit...昨夜眠りにおちた時の状態よりも向上して目をさますならば、夜の闇も無駄ではなく効果があったことになる。bear と prove は subjunctive present

て、我々が寝たときより 1 層高い生活に目ざめない 1 日（それを 1 日と言えるならば）から、殆んど何も期待できない。それ故に、夜の闇はその果実を結び、光におとらず、すばらしいものであることがわかる。(100)

これも訳し上げであり、ほかの訳に比べて直訳の度合いが大きい。したがって波線部の「それ故に」は何を指しているのか不明になり、読者は途方に暮れる。

神原栄一（訳）(1983)『森の生活』（荒竹出版）
朝、それは一日で最も記憶すべき時であり、目覚めの時である。朝は最も眠気が少ない。少なくとも一時間だけは、昼夜を問わず他の時間にはまどろんでいるある部分も目覚めている。召使いなどに機械的に揺すられてではなく、われわれの守護神によって目覚めさせられている。工場のベルによってではなく、天体の奏する音楽の波動と大気中に充ちあふれる芳香にともなわれつつ、われわれ自身の新たに獲得した力と、内から自然にわき上がる熱望とによって、前の晩眠りについた時よりもさらに高揚した生活へと目覚めさせるのだ—こうあってこそ夜の暗黒も実を結ぶことになり、それが光におとらないものであることが分かるのだ—こうして始まる一日でなければ、それを一日と呼べるにしても、その一日からは多くを期待できない。(93)

ここでも長大な訳し上げが見られ、’Little is to be expected of that day’の訳が最後になっている。情報構造は大きく変化している。

佐渡谷重信（訳）(1991)『森の生活—ウォールデン』（講談社学術文庫）
こうして、一日のうちで最も記念すべき時は朝の目覚めである。この時こそ眠気を誘うものはない。昼夜を問わず、われわれの心の中には、なお、微睡（まどろ）む時間的余裕があったとしても、少なくとも、一時間だけは目覚めている。もし、一日と呼べる日があるとすれば、われわれは機械的に召使によって身体を突かれて目覚めるのではなく、われわれ自身の守護神によって目覚める。工場のベルによってではなく、天体の音楽の調べと大気を満たす香りにつつまれ、新たに貯（たくわ）えられてきた活力と精神が心のうちから高められたときに、やがて目覚めてゆく。前の晩に眠りについた時よりも、さらに高い生活へと目覚めてゆく。その時、夜の闇が深くなっても、それ以上に朝の光が勝っていることに気づくのである。このようにして始まる一日でなければ、その一日に期待するものは何もない。(136-137)

訳し上げの負荷を減らそうとしているのはわかるが、ここでも’Little is to be expected of that day’の訳が最後に来ている。波線部分は誤訳である。

飯田実（訳）(1995)『森の生活—ウォールデン（上）』（岩波文庫）
朝は、一日のうちでもとりわけ記憶すべき時間帯であり、目覚めの時である。これほど眠気を感じない時間はない。われわれの内部で昼といわず夜といわず眠っている部分でさえ、少なくとも一時間ほ

どは目を覚ましている。もしわれわれが内なる「霊性」によってではなく、召使などの機械的な揺さぶりによって目覚めるとしたら、あるいは新たにたくわえられた力と内からみなぎる向上心にうながされて、ゆったりとうねる天上の音楽や大気を満たす芳香に包まれながら目覚めるかわりに、工場の始業ベルなどを聞いて目覚めるとしたら—要するに、眠りについてときよりも高い生活に向かって目覚めるのでないとしたら、その日一日—仮に一日と呼ぶ価値があるとして—からは多くを期待することはできない。そうなると、闇が果実を結ぶことや、闇が光に劣らずよいものであることを証明することもできない。(160)

これも訳し上げである。最後の波線部分は意味的整合性を確保するために、否定として訳している。

酒本雅之（訳）(2000)『ウォールデン—森で生きる』（ちくま学芸文庫）
朝は一日のうちでもっとも注目に値する時、すなわち目ざめの時だ。睡魔の力がいちばん弱い時だ。少なくとも一時間は、この時が過ぎれば昼も夜も眠りこけるぼくらの部分までが目ざめている。ぼくらが自分の「霊性」ではなく、召使いの誰かにただ機械的にこづかれて目ざめ、工場のベルではなく、ゆるやかに波動する天界の音楽と大気を満たす芳香を伴奏に、自身の内面に発する新たに獲得された力と憧憬によって、眠りについたときよりも高次な生活へと目ざめるのでないような一日なら、かりに一日と呼べるとしての話だが、あまり期待は持てそうにない。高次な目ざめができれば闇が実を結び、光に劣らずおのれ自身も実は善だと分かるはずだ。(135)

同様に訳し上げである。最後の波線部分は意味的整合性を確保するために「高次な目ざめができれば」を補っている。

今泉吉晴（訳）(2004/2016)『ウォールデン　森の生活』（小学館文庫）
朝の中でも、だんぜん印象ぶかい朝は、目覚めの朝です。眠気が最小に限られる覚醒の朝です。普段ならいくらかはまどろむ心も、目覚めて少なくとも一時間は、十二分に覚醒しています。となれば、人が生き生きした内なる働きで目覚めずに、召使いや機械の働きで目覚めさせられるのでは、その一日は（一日と呼べないでしょうが）何も期待できません。風が運ぶ香りや内なる天上の音楽と共に、再生する活力と希望によって目覚めず、工場のベルで目覚めさせられる一日に、つまりは眠りについた前の晩より高い意識で目覚めない一日に、何ができるでしょう。（原文改行）夜の闇には、明るい昼と同じく無限の価値があり、夜の眠りもまた、果実を育みます。(222-223)

パラフレーズであり、原文とは別のものであろう。波線部分は意味的整合性に欠けており、前の文とつながらない。

3. Sounds

次はSoundsの章からの一節で、蒸気機関車の描写である。

When I meet the engine with its train of cars moving off with planetary motion,—or, rather, like a comet, for the beholder knows not if with that velocity and with that direction it will ever revisit this system, since its orbit does not look like a returning curve,—with its steam cloud like a banner streaming behind in golden and silver wreaths, like many a downy cloud which I have seen, high in the heavens, unfolding its masses to the light,—as if this travelling demigod, this cloud-compeller, would ere long take the sunset sky for the livery of his train; when I hear the iron horse make the hills echo with his snort like thunder, shaking the earth with his feet, and breathing fire and smoke from his nostrils, (what kind of winged horse or fiery dragon they will put into the new Mythology I don't know,) it seems as if the earth had got a race now worthy to inhabit it. (11-12)

これは長い掉尾文(periodic sentence)であり、2つの長大な従属節（When節）の後に短い主節（下線部）が続いている。この形を日本語訳で再現しようとしても補文標識"when"と「…とき」の現れ方が異なるため、日本語訳は理解不能なものになるおそれがある。英語の場合、補文標識(if, though, that, whether, whereなど)は補文の最初に来るが、日本語では末尾に来る（…ならば、…だけれども、…という、など）から、英語を文法通りに日本語に訳すと、それまでの部分の文法的位置づけは補文（従属節）の終りまで、わからないことになる。したがって読者は日本語の補文標識が現れるまでそれまでの部分を記憶に保持しておかなければならない。従属節が短い場合はあまり問題にならないが、この例のように長くなると、読者には大きな負荷となる。

通常、文体論などではたとえば、「文のより主要なメッセージが文尾にいたるまで示されない文を掉尾文と呼ぶ。（…）ある程度の長さを持って、前おきの句や従節をつみ重ねて意味上の興味とサスペンスをかもし出させ、最後に結論を与える文がそれである」(池田, 1992:362)のように、比較的あっさりとした扱いですませているが、高垣(1933)は掉尾文と散列文(loose sentence)を対比させて、掉尾文が読者の側に「緊張」と「注意」を要求することを指摘している。

> 「我々の思考は殆んど常に loose sentence の形で表現されると言つていい程であつて、それが極めて自然である。然るに periodic sentence の形を用ゐる場合には吾々は多くの例に於て技巧的になる。読者の注意を半途に suspend させて、センテンスの終りに至つて始めて解決してみせると云ふのである。読者の側にあつても緊張を強いられるし、さういふセンテンスを綴る筆者の側にあつても、相当の工夫を必要とする次第である。（中略）Loose sentence ならばかなりの長文でも、period に到達するまでに若干の息つぎの機会を与へてくれるから読者は安易について行けると言ふものの、文意の中心点が漠然たることを免れない。併し長い periodic sentence になると文尾まで注意を外らすことが許されず、さういふセンテンスは往々pompous な感じを伴ふけれども、ぐ

つと引しまつた印象に導く。」(57-58)

掉尾文はサスペンスという効果を生むが、同時に読者に理解されないというリスクも伴うのである。この場合「理解されない」というのは、読者の「緊張」と「注意」が限界に達することを意味する。「緊張」と「注意」は、別の側面から見れば作動記憶（の容量）のことである。Leech & Short (1981)は「サスペンスの要素は明らかに予測的構成素の大きさに依存している。予測的構成素が長ければ長いほど、記憶にかかる負担は大きくなり、緊張は高くなる」(*ibid.* 226)と言う。以下に構文解析の例と試訳を示す。

When I meet the engine with its train of cars
moving off with planetary motion,—or, rather, like a comet,
for the beholder knows not
if (with that velocity and with that direction) it will ever revisit this system,
since its orbit does not look like a returning curve,
—with its steam cloud like a banner streaming behind (in golden and silver wreaths),
like many a downy cloud [-which I have seen],
high in the heavens,
unfolding its masses to the light,
—as if this travelling demigod, this cloud-compeller,
would ere long take the sunset sky for the livery of his train;
when I hear the iron horse make the hills echo with his snort like thunder,
shaking the earth with his feet,
and breathing fire and smoke from his nostrils,
(what kind of winged horse or fiery dragon they will put into the new Mythology I don't know,)
it seems as if the earth had got a race [now worthy to inhabit it].

（試訳）
私は機関車が貨車を引いて惑星のように走り去るのに出逢う。いや惑星というよりは彗星であろうか。というのも、見ている人はあの速さと方向では再びこの太陽系に戻って来るかどうか分らないからだ。何しろその軌道は戻って来ると思わせるような曲線ではないのだ。またその蒸気の雲はまるで幕が金銀の花環となって後ろに流れているようで、むかし見たたくさんの綿毛の雲に似ている。それは空高く、ひとかたまりだった雲をほぐして輝かせる。そのさまはまるで旅をして雲を集める神人が、その夕焼けの空をほどなく彼の従者たちの装いに変えるかのようだ。それから私は鉄の馬がその鼻息を雷のように丘という丘に響かせるのを聞く。その馬は四肢で大地を揺るがせ、火と煙をその鼻孔から吐き出す。（いかなる種類の天馬や火竜が新しい神話に加えられるのか私は知らない。）そんな機関車を見るとき、今やこの地球が住むにふさわしい種族を得たように思われるのだ。

既存の訳にコメントしていく。

水島耕一郎（訳）(1911 M44)『森林生活』（成光館書店）
余は機関車が其後に客車の一列を率ゐて、行星の如き速力を以て走り去り、—或は寧ろ彗星の如きだ。其故は、軌道が回帰的曲線の如く見えないから、看者は、かゝる速力を有し、かゝる方向に進むところの列車が、再び此太陽系統を訪ひ来べきか否かを予知し得ないのである—其湯気が旄旗[ぼうき]*の如く後に金銀の環となつて流れて、恰も無数の巻雲が天際高く其大塊を白光に展開するにも似たのを見る毎に、—さながら此旅行する半神半人の怪物、或は雲霧の製造者は、遠かず(?)夕映の空を其行列の役服にするかとも疑はれた。余は此鉄馬が其足を以て大地を震撼せしめ、其鼻孔からは火と烟とを吹き乍ら、其鼻嵐を以て、山又山に雷の如き反響を起さしめるのを聞く毎に、恰も地球は今や之に住むだけの価値ある人種を得たかの如くに思はれた。(239-240)

下線部が訳し上げになっているために、「余は…毎に」の間が長くなり、一読して理解するのは難しい。また最初のWhen節を「従属節＋主節」のように訳しており、掉尾文構造は再現されていない。また、”what kind of winged horse or fiery dragon they will put into the new Mythology I don’t know,” が省略されているなど、簡略化もある。

古館清太郎（訳）(1930 S5)『ウオルデン』（『世界大思想全集第 32 巻』）（春秋社）
機関車が、その後に一列の客車を接続して、星の運行のやうに動いて行き—と云ふよりは寧ろ彗星のやうにと云つたがよい。何故なら、軌道は回帰線とは違ふやうに見えるので、観測者には、そんな速度で、そんな方向へ、進んで行く列車が、再び此の太陽系統へ戻つて来るか何うかを、予知できないから—そして、金と銀の輪になつて、後ろの方へ流れる旗のやうな、又は、蒼空高く、その大きな雲の塊を、光に向つて展開させてゐる、あの、無数の巻雲のやうな蒸気を吐いて行くのに出会つた時、—此の半神半人の旅行者、もしくは雲の製造者は夕焼けの空を、彼の供廻りの仕着せにでもしてゐるやうに思はれた。私は此の鉄の馬がその足で大地を震はせながら、又、その鼻の穴から、火焔と煙を吐きながら、（どんな種類の飛馬もしくは火龍を、彼等が、新しい神話の中に出現させたのか、私は知らない）山々にその鼻嵐を雷霆[らいてい]の如く反響させるのを聞く時は、地球には今こそ住むに足るだけの価値ある人種が出来たやうに思はれた。(96)

訳し上げの負荷が大きすぎる。前半の従属節の処理は水島と今井に類似する（発表は今井が1925年であるから今井が先）。やはり最初の「時」の位置に無理がある。また一部に訳の省略がある。

今井規清（訳）(1948 S23)『森の生活』（大泉書店）
機関車が、其の後に一列の客車を接続して、星の運行のように動いて行く—と云ふよりは寧ろ彗星

* 旄旗(ぼうき)とは昔、中国で、天子から任命のしるしとして征将、使節に与えられた旗。旄牛(からうし)の尾の毛を竿の先につけたもの（『精選版日本国語大辞典』）。

のやうに、と云つた方が良い。何故なれば、軌道は回帰的曲線のやうには見えないから、見てゐる者は其の様な早い速力で、軌道の方向に進んで行く列車が、再び此の太陽系統へ戻つて来るか何うかを、予知出来ないからだ—そして其の湯気が、旗のやうに、金と銀の輪になつて、後ろの方に流れる有様は、さながら無数の巻雲が蒼空たかく、その大きな雲の塊を、白光に展開するやうであるのを見る度毎に—此の旅行する半神半人の怪物、或ひは雲の製造者は、夕焼けの空を、彼の供廻りの仕着せにするがやうに思はれた。私は、此の鉄の馬が、其の足で以て大地を打ち震はせ、其の鼻の穴から、火焔と煙とを吐きながら、その鼻嵐で山々に雷霆の如き反響を起すのを聞く毎に、地球には今こそ住むに足るだけの価値ある人種が出来たかの如くに思はれた。（彼等は、如何なる種類の天馬又は火龍を、新しい神話の中に出現させたのであるかを私は知らない。）(161)

多少の工夫はあるが、掉尾文構造をそのまま再現しようとしている。その結果は「度毎に」、「毎に」を修飾する長大な訳し上げになっている。水島訳、古舘訳と同様、ここでも”as if….his train”の部分が前半の主節のように扱われている。なお、今井訳には古館訳と酷似した箇所がある。

酒井賢（訳）(1948 S23)『ウォルデン池畔にて』（養徳社）
機関車があとに一列の客車をつないで遊星のやうに動いてゆく—いや、彗星のやうに動いてゆくといつたほうがいいかもしれない。レールは回帰的曲線のやうには見えないから、あのやうな速さで、あんな方向にすすんでいつて、果たして列車がふたたびこの太陽系に戻つてくるかどうか見てゐる人にはわからないから。いつの頃であつたか、天たかく光りに向つて雲がそのかたまりを解いている美観に見とれたことがあつた。ちやうど、そのときの柔かいむくむくしたたくさんの雲のやうに—機関車のゆげの雲が金銀の輪となつて旗のやうに後ろの方へ流れていく—この雲をつくりながら旅をいそぐ半神半人は、やがて美しい夕やけ空を随行員の揃ひのきものにするかなんぞのやうであつた。かうした列車の通過に出会ふとき—この鉄の馬が、あらあらしい鼻いきで雷のやうに山々をこだまさせ、足で大地をうち震はせ、鼻の穴から火焔と煙とをぽっぽぽっぽと吐く音を聞くとき、大地には初めて住むに足る人種ができたかと思はれる。（今後どんなふうの天の馬や火の龍が「新しい神話」の中に這入つて来るか私は知らない。）(63-64)

「When..., when...（…とき、…とき）」の構造を維持しているが、最初のWhen節の内部を散列文にした上で、それを「かうした…に出会ふとき」によって総括するという工夫をしている。酒井は読者に対して認知的負荷の多い構造を避けようとしているようである。しかし、波下線を付した部分を原文と対照すれば、’with its steam cloud’以下の情報構造が完全に再構成されているのが分かる。

荻野樹（訳）(1948 S23)『人生論』（萬里閣）
機関車が、その後に一列の客車を接続して、星の運行のやうに動いていき——といふよりはむしろ彗星のやうにといつたがよい。何故なら、軌道は回帰線とは違ふやうに見えるので、観測者には、そんな速度で、そんな方向へ、進んで行く列車が、再びこの太陽系統へ戻つて来るかどうかを、予知

出来ないからだ。――そして、金と銀の輪になつて、後ろの方へ流れる旗のやうな、または、蒼空高く、その大きな雲の塊を、光に向つて展開させてゐる、あの無数の巻雲のやうな蒸気を吐いて行くのに出会つた時、――この半神半人の旅行者、もしくは雲の製造者は、夕焼けの空を、彼の供廻りの仕着せにでもしてゐるやうに思はれた。私は、この鉄の馬が、その足で、大地を震はせながら、またその鼻の穴から、火焔を吐きながら（どんな種類の飛馬もしくは火龍を、彼らが、新しい神話のなかに出現させたのか、私は知らない）山々にその鼻嵐を雷霆の如く反響させるのを聞く時は、地球には今こそ住むに足るだけの価値ある人種が出来たやうに思はれた。(149-150)

荻野も原文の掉尾文構造をそのまま再現しようとしており、当然大きな訳し上げをともなうことになる。しかし、この訳し上げによる文を一読で理解することはそもそも人間の認知の構造上無理な話なのだ。英語の原文を読む場合、読者はWhenという接続詞を軽く記憶に留めながら節ごとに処理してゆくが、節が長くなればwhenを保持できず、忘れてしまうこともありうる。（普通の文でも節を処理するときに一部を記憶しておくことはあるが、大きな記憶の負荷にはならないことが多い。）なお、荻野訳にも今井訳に似た箇所がある。

岡本通（訳注）(1949 S24)『Walden (Helix Library 5)』（筑紫書房）
私は機関車が列車を引いて、遊星の様に、否寧ろ彗星の様に（というのは、見るものにとってその軌道はまた戻って来る曲線の様には見えないので、あの速度と方向をとっていては二度と再びこの太陽系を訪れるかどうか分らぬからだ）―又吐き出す蒸気の雲が金銀の花環をなして、私がこれまでに見た数多くの綿毛雲の様に空高く、もくもくと日に輝き、あだかもこの旅馳る半神、この雲の支配者が、遠からず日没の空をその列車のお仕着せとでもするかの様に―進んで行くのに出遭う時―或は又この鉄の馬が雷に似た彼の鼻息で丘又丘を鳴り響かせ、四肢を以て大地を揺り、鼻孔からは火と煙とを吐き出す時（新たな神話の中にどの様な種類の天馬や火焔に包まれた龍が加えられるかは知らないが）―あだかも、今や大地に住むにふさわしい一族が現れたかの思いがする。(10-11)

岡本は原文の掉尾文構造を最も忠実に再現しようとしている。「機関車が」は「進んで行くのに出遭う」に、「鉄の馬が」は「吐き出す」に、冒頭の「私は」は、末尾の「思いがする」に呼応する。しかしこの文を理解するのは困難である。

宮西豊逸（訳）(1950 S25)『森の生活（世界思想選書）』（三笠書房）
私は列車を連らねた機関車が、遊星の如き運動をもつて通過するのに出会う時、―いやむしろ彗星の如くだ。なぜなら観望者は、あの速力と方向をもつてしては果してこの太陽系へ舞い戻れるか否かを知らない。その軌道は回帰的な線には見えないからだ―蒸気雲を旗のように後方へ金銀の渦巻に流しながら、かの空高く垂れさがる多くの雲が、その塊を光に向つてひろげてゆくように―あたかもこの旅する半神、この雲の支配者は、やがて日没の空を我が列車のお仕着せにするかと怪しまれるばかりだ。この鉄馬が雷のような鼻息で丘をどよめかせ、足で大地を揺りながら、鼻から炎と煙を

吹いて来るのを聞くとき＜どんな種類の翼ある馬、或いは炎のような龍として、新しい神話に入れられるか、私は知らない＞あたかも大地は生息するに値する種族を得たかのように見える。(87)

最初のWhen節の内部（下線部）で順送りの訳を試みているが、水島訳などと同じように、最初のWhen節を「従属節＋主節」のように訳しており、原文の主節との関係が絶たれている。

神吉三郎（訳）(1951 S26)『森の生活—ウォールデン』（岩波文庫）

いくつもの車台をあとにつらねた機関車が、遊星の運行のように—あるいはむしろ、彗星のように、（といった方がよいかもしれない、その軌道は循環する曲線とは見えないし、あの速力とあの方向ではふたたびこの太陽系にもどってくるかどうか観ていておぼつかないから）その蒸気の雲を、金銀の花環の形をなしてうしろにたなびく旗と見せつつ、また、私の見たことのある多くの綿毛の雲にも似て天上たかく、そのかたまりを日の光に繰りひろげつつ—この飛びかける半神、この雲を切りしたがえる者はやがて日没の空をおのが供奉の仕着せにすることだろうと思わせつつ、駛り往くのに出あうとき、あるいは、この鉄の馬が雷のようないななきで山々をこだまさせ、その足で大地をふるわせ、火と煙とを鼻の孔から吹き出す（世人は、新しい神話のなかにどんな種類の翼ある馬、火を吹く竜を汽車の象徴として加えようとしているのか知らないが。(マヽ)）のを聞くとき、わたしはこの地球が今やはじめてそれに住む値打ちのある種族をもったのだという気がする。(155)

神吉訳も原文の構造を維持しようとしているが、訳し上げとなり、「機関車が」と「駛り往くのに出あうとき」、「この鉄の馬が」と「のを聞くとき」の距離が長くなり文意を把握するのは難しい。

富田彬（訳）(1953 S 28)『森の生活—ウォールデン』（角川文庫）

列車を引きつれた機関車が、遊星の運行のように—いや、むしろ彗星のようにと言うほうがいいかもしれない、というのは、その軌道は回帰する曲線のようには見えぬから、あの速力であの方向に走るのでは、再びこの太陽系を訪れるかどうか、見ている者には疑わしいからだ—その蒸気の雲を、金色と銀色の環となってうしろになびく旗かとも見せ、また私がいつか見たことのある、空高くそのかたまりを日の光に向ってひろげて行くいつつものふわふわした雲かとも見せつつ—この旅する半神、この雲を駆使するものが、まもなく日没の空をお供の列車の仕着せにするだろうと思わせつつ、走り去るのに出会う時、そしてこの鉄の馬が雷のような彼の鼻息で山々にこだまを呼び、足で大地を揺るがせ、鼻の孔から火と煙を吐き出すのを聞く時、（これがどんな種類の翼ある馬や火を吐く竜として、新しい神話に加えられるようになるのか、私は知らぬが、）地球は今こそそこに住むにふさわしい一つの種族を得たように思われるのである。(130)

神吉訳と同様、従属節内の主部と述部の距離が長過ぎて一読して理解するのが難しい。

出水春三（訳注）(1957)『森の生活（ウォールデン）Phoenix Library』（南雲堂）
機関車が車輛の列をひいて、遊星の運行するように(?)、むしろ彗星のごとく（というのは、軌道が回帰曲線らしくは見えないので、あの速力とあの方向では、はたしてこの宇宙へもどってくるかどうか、見ていて分からないのである）蒸気の雲を旌旗のように金銀の渦をまいてうしろにたなびかせ、そのさま天空たかく光りにかたまりを拡げるのを何度もわたしの目にした綿毛雲にも似て、あたかもこの旅する半神、この雲を駆使する者が、まもなく夕焼け空を供廻りの列車の仕着せにするかのごとく、去りゆくのに出会うと、あるいは、この鉄馬が雷のごとき鼻嵐に丘々をこだまさせ、大地を足でうちふるわし、火と煙を鼻孔から吹き出す音を聞けば（どんな翼馬や火竜が新しい神話に入れられるのか、私はしらないが）、さながら大地は今や住むにふさわしい種族を得たかとも思われる。（81）*

出光訳は、主語「機関車が」に対応する述部が行方不明となり（結局は、「去りゆくのに出会うと」であるが）、読者は迷路の中を歩き回ることになる。「そのさま天空たかく光りにかたまりを拡げるのを何度もわたしの目にした綿毛雲にも似て」もどうなっているのかわからない。この訳文では理解は大きく損なわれる。

真崎義博（訳）(1981)『新訳・森の生活—ウォールデン』（JICC出版局）
何台もの車輛を引いた機関車が惑星のように—あるいは、その軌道は戻ってくるような曲線には見えないし、あの速度と方向ではもう一度この太陽に戻ってくるかどうかわからないから彗星のようにといった方がいいかもしれないけれど—上記の雲を金や銀の花輪で飾られたたなびく旗のように見せながら、また、高い空で自分を日の光に当てている綿雲のように見せながら、まるでこの旅する半神、この雲を従えるものがやがて自分の尾に夕日の空をまとうかのように見せて走り去るのに出会うと、あるいは、その機関車が雷のような鼻息で丘をこだまさせ、その足で大地をふるわせ、鼻の穴から火と煙の息をはくのを聞くと（人々がどんな種類の翼のある馬とか火をふくドラゴンを新しい神話につけ加えようとしているのか知らないけれど）、地球がやっとそこに住むのにふさわしい種族を手に入れたのだ、という気がする。(88)

この訳も、「…機関車が」と「走り去るのに出会うと」の間が長すぎて理解に困難を来す。また、この述部「走り去るのに出会うと」の前の「見せて」は「この旅する半神」に対応する動詞なのだが、「見せて走り去る」と連続しているために、「出会うと」が「旅する半神」に対応しているように取られかねない。

神原栄一（訳）(1983)『森の生活』（荒竹出版）
何台もの車両をしたがえた機関車。遊星の運行を思わせるような動きで—というより彗星のように、というべきだろう。その軌道が循環曲線となっているように見えない以上、あの速度であの方向に進む

* この箇所には次のような訳注がついている。cloud-compeller「雲を駆使する者」元来は雷神としての Jupiter または Zeus を形容する語だが、これを移して機関車に用いたもの。take the sunset sky...train 夕焼け空の反映があとにつづく列車を染めて、まるで揃いの着物でもまとつたように見えること。

のでは、この太陽系にふたたびもどってくるかどうか見る者には分からないのだから—金銀の花環となってうしろにたなびく旗にも似た、また天空高くその塊を日の光に繰り広げる、あの見覚えあるたくさんの綿毛のような雲にも似た水蒸気の雲を吐きつつ—まるでこの駈ける半神(デミゴッド)、雲をしたがえるゼウスは、やがて夕焼けの空をその従者のそろいの服にでもしようとするかのようだ—その機関車が進んでゆくのを見る時、また、その鉄の馬が大地を震わせ、鼻孔から火と煙を吹き出しながら(世人が翼を持ったどんな種類の馬、火を吹くどんな種類の竜(りゅう)を新しい神話にくわえるつもりか知らないが)雷のようないななきで山々をこだまさせるのを聞く時、地球は今や真にそこに住むに値する種族を初めて得たように思えてくる。(122)

この神原訳では、主語「機関車」がそれまでの記述を総括するように従属節の終わりに再び「その機関車が」として登場する。これにより、読者に、それまでの長々しい記述が機関車についてのものであったことを想起させているのである。しかし、最初の従属節内部のそれまでの記述は実にわかりにくい。

佐渡谷重信(訳)(1991)『森の生活—ウォールデン』(講談社学術文庫)
私は何台もの車両を引く機関車に出合うのだが、それは惑星の運行のように、というより、彗星(すいせい)のように立ち去ってしまう。(1)太陽系の軌道が循環曲線をなしているようには見えないから、あの程度の速度で、その方向に驀進(ばくしん)しても、太陽系に帰還するかどうか、見分ける人間はいないからだ。また機関車の吹き出す蒸気の混った噴煙は金や銀の花輪で飾りたてられた旗がたなびく姿に似ているし、さらに、天空を高々と浮遊しながら、その白雲を太陽の光海に晒(さら)している、あの見覚えのある綿雲の姿にも似ているのだ。あたかも天駈(あまか)けめぐる半神半人(デミゴッド)、この雲を従える者が、やがて茜(あかね)に染まる夕焼空を自分の従者の正装にしようとしているのだろう。また、機関車(鉄の馬)が、雷のような嘶(いなな)き声をたてて、丘から丘を轟音(ごうおん)で反響(こだま)させて進むのを聞く時、足元の大地は振動し、その鼻孔からは火と煙を吐き出すのだ(翼をつけた馬、火を吐く竜など、人はどんな種類のものを新しい神話につけ加えるか、私は関知しないが)。(2)そしてまた、あたかも地球がようやく、そこに住むにふさわしい人種を受け入れてくれたようにさえ思えるのだ。(177)

波線の下線部(1)は原文の意味を取り違えており、理解に苦しむ。同じく(2)は原文の意味合いを再現できていない。ほとんど散列文のようになっているにもかかわらず、従属節内部に訳し上げもある。

飯田実(訳)(1995)『森の生活—ウォールデン(上)』(岩波文庫)
何台もの車輛を引っ張る機関車が、惑星の運行さながら(もっともその軌道は元に戻る曲線を描いてはいないようだし、速度と方向からして、再びこの太陽系に戻ってくるかどうかわからないのだから、むしろ彗星に似ているといったほうがよいのかもしれないが)、蒸気の雲を、金色と銀色の渦巻く旗のように、あるいは私がかつて見た、はるか上空で太陽に照らされてしだいにほぐれてゆく綿毛雲のようにうしろにたなびかせながら驀進(ばくしん)するのに出会うとき—この旅する半神、いや、雲を駆り立てるゼウス

は、まもなく夕焼け空をお供の車輛のお仕着せにしてやろうとしているかのようだ—、あるいはまた、この鉄のウマが雷鳴のような鼻息をまわりの丘にこだまさせ、その足で大地を揺るがし、鼻腔から火と煙の息を吐き出すのを耳にするとき（ひとびとがどのような翼あるウマや火を吐くドラゴンを新しい神話のなかに登場させるつもりかは知らないが）、私は、いまこそ地球がそこに住むにふさわしい種族を得たのではないか、という気がしてくるのだ。(211)

下線部は訳し上げであり、「機関車が」から「驀進する」までの距離が長すぎて読者に過大な負担を要求する。また、「—この旅する半神、いや、雲を駆り立てるゼウスは…かのようだ—」の部分が最初の読みではまるで主節のように読めてしまう。

酒本雅之（訳）(2000)『ウォールデン—森で生きる』（ちくま学芸文庫）
列車は惑星のように、と言うよりむしろほうき星のように動き出す。何しろあれだけの速さといちずさだから、見ている者には、それがはたして元の系に戻ってくるのかどうか分からなくなる。軌道が第一、回帰する曲線のようには見えないのだ。その列車を従えた機関車が蒸気の雲を旗じるしに、金と銀との花輪（はなわ）の形になびかせるさまは、天空高くにぼくが見たあまたの綿毛雲（わたげ）が、折りたたまれたおのれの襞（ひだ）を光に向かって開いて行くのに似ていたし、旅を行くこの半神、雲の運行を司るこの神が、まもなく夕暮れの空をおのれのあとに連なる者らのお仕着せにしたがってでもいるのかと思わせかねぬ趣（おもむき）だったが、こういう機関車を目の当たりにし、鉄の馬たるその名の通り、雷鳴もどきの鼻息であたりの山並みをこだまさせ、大地を足で踏み鳴らしつつ、鼻孔（びこう）からは火と煙を噴き出す音を耳にするとき（新しい「神話」に加わる翼（つばさ）あるウマや火を噴く竜（りゅう）はいったいどんな類（たぐい）のものになるやら）、ようやく住むにふさわしい種族が地球に誕生したのだと思えてくる。(177)

（波線の部分の訳がおかしいが）参列文を連ねて「こういう機関車を目の当たりにし」でそれを統括するという形で、そこまではうまく処理しているが、二番めのWhen節は訳し上げになって主節に続くという形になっている。

今泉吉晴（訳）(2004/2016)『ウォールデン　森の生活（上）』（小学館文庫）
たくさんの車輛を一列にして牽（ひ）く蒸気機関車が、夜空を進む惑星のように、金色と銀色の渦巻くのぼりをたなびかせて驀進（ばくしん）する姿を見ると、私はついに、地球にふさわしい、人間よりもっとすごい生き物が誕生した、と思ったりします。もっとも、その運行の速度と角度から、列車はふたたび地球に戻れそうにもなく、軌道も回帰曲線を描かないのですから、惑星というより彗星といったほうがいいでしょう。機関車が吐き出す蒸気の煙が、時に天高く舞い上がって、太陽に照らされ、綿毛雲のようにほぐれては消えます。雲を駆り立てて消えていく半神半人は、夕焼け雲を列車に着せるつもりかな、と思わせたりします。けれども、この鉄の馬は、雷鳴のような鼻息をあらゆる丘にこだまさせ、四肢で地面を揺るがせ、鼻孔から火と煙を吐き出すのですから、人を超える生き物の誕生、と言わざるを得ません（私には、人々が鉄の馬に新たな着想を得て、どんな翼を持つ馬や火を吐くドラゴンを神話に加えるの

か、見当もつきません）。

前後をかなり恣意的に、かつ大幅に入れ替えており、自由訳に近い。下線部は前半の従属節の後半に出てくる節と、最後に出てくる主節を合わせたもの。波線の下線部は、訳の結構を整えるために繰り返している。

まとめ

このような比較をしてみると、「訳し上げ」の規範としての力がいかに強力であるかがわかる。そして訳し上げがいかに意味を歪め、読者の読みを困難にするかが見えてくる。この傾向は他の作品の翻訳比較によっても確認できる。しかし、翻訳者の中にはたとえ情報構造の理論は知らなくても、情報の流れとそれが孕む意味に気づいている者もいて、ときおり順送りの訳として現れるのである。今回の分析では酒本訳に顕著に見られた。

問題は、順送りの訳の系譜が、それがすでに理論的根拠を備えているにもかかわらずうまく継承されていないこと、そのためもあってか訳し上げという翻訳手法が依然として支配的であることである。その意味に限っていえば、明治以来翻訳の技術的進歩はほとんどないと言ってよい。今、理論的根拠を備えた技術論が必要なゆえんである。

.....

【著者紹介】

水野　的（MIZUNO Akira）東京外国語大学ポルトガル＝ブラジル語学科卒。元青山学院大学文学部英米文学科教授。2014年－2018年日本通訳翻訳学会会長。著書に『同時通訳の理論』（朝日出版社）、編著に『日本の翻訳論』（法政大学出版局）。

【文献】

Bernardo, R. (1979). The Function and Content of Relative Clauses in Spontaneous Narratives, *Proceedings of the Fifth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 539-551.

Chafe, W. (1984). How people use adverbial clauses. *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 437-449.

Lambrecht, K. (1994). *Information Structure and Sentence Form: Topic, focus and the mental representation of discourse referents*, Cambridge: Cambridge University Press.

Leech, G. N. and Short, M. H. (1981). *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. London & New York: Longman.

池田拓朗 (1992)『英語文体論』（研究社出版）

女鹿喜治 (2009)「談話から見た主節と関係詞節の情報伝達の特徴」『日本赤十字広島看護大学紀要』9: 21-29.

高垣松雄 (1933)『英文の鑑賞と分析』（健文社）

田中彰一・村上晉 (1995)「近代英語における関係詞節の意味と機能」『研究論文集/佐賀大学教育学部』42(2): 15 -29.

安井稔 (1978)『新しい聞き手の文法』（大修館書店）

柳父章・水野　的・長沼美香子 (2010)『日本の翻訳論－アンソロジーと解題』（法政大学出版局）

---

[i] 「比較翻訳」というのであれば多言語間の共時的(synchronic)な比較もありうるし、少数ながら実例もある。しかしそれは筆者の能力をはるかに超えるため日本語の翻訳テクストに限定した。ただ、参看できたポルトガル語訳では、最初の Economy の箇所は次のようになっていた。

Eu náo imporia tanto meus assuntos à atenção de meus leitores se meus concidadãos não tivessem feito indagações muito particulares sobre minhas condições de vida, que alguns diriam impertinentes, embora não me paraçam nada impertinentes, e sim, dadas as circumstâncias, muito naturais e pertinentes.

--- Bottmann, D. (trans.) (2010). *Walden ou A vida nos bosques*, L & PM Editores.

Google 翻訳による back translation では次のようになり、（語彙に調整が必要なものはあるが）構文がほとんどそのまま再現できていることがわかる。関係代名詞 que の先行詞は minhas condições de vida (my living conditions)と訳されており、まぎれがない。

I would not impose my subjects so much on the attention of my readers if my fellow citizens had not asked very particular questions about my living conditions, which some would say impertinent, although they do not seem impertinent to me, but, given the circumstances, very natural and pertinent.

編集後記

MITIS Journal 創刊号は新型コロナウイルス禍のさなかに発行されます。
翻訳はわかりませんが、現在通訳の実務者の仕事は激減し、大学関係者も様々な困難とたたかっています。図書館も閉館し、研究の状況も悪化しています。そのせいもあってか、創刊号にはあと数本の投稿がある予定でしたが、投稿にいたらなかったことは大変残念です。また別の事情で掲載できなかったものもあります。
しかし、既存の社会の仕組みが大幅な組み換えを要求されている今、どんな形にせよ研究の持続と発表の場を確保し、発信していくことには意義があると考えています。MITIS Journal は大学、在野を問わず、研究者のために翻訳通訳研究の発表の場を提供していきます。

次号の締め切りは 9 月末日です。多くの投稿をお待ちしています。

2020 年 4 月 21 日
編集長　水野　的

MITIS Journal of Translation and Interpreting Studies 投稿規定

1. 投稿の資格

著者（筆頭著者および共著者）が MITIS の研究員*であること。ただし編集委員会が認めたもの、あるいは編集委員会から依頼された原稿はこの限りではない。

*研究員になるためには、(1)氏名 (2)所属・職名(フリーランスの場合はその旨を明記) (3)略歴（5～10 行程度） (4)研究分野 (5)必要な場合は郵便物転送用の住所 (6)推薦者 1 名（いなくても可）を記したメールを水野のメールアドレスまでお送り下さい。(a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp)審査の上決定します。

2. 原稿の種類

原稿の種類は、研究論文、研究ノート、報告（実践、調査、学会等）、資料、エッセイ、書評等である。

3. 投稿の方法

1) 投稿は電子メールに添付して送付する。

2) メールの送付先は、MITIS Journal of Interpreting and Translation Studies 編集委員会とする。メールアドレスは a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp

3) メール本文中に、提出日、論文題目（日本語論文の場合は英文の題目も明記する）、所属・職名、著者略歴、電子メールアドレス、電話番号を記載すること。

4. 原稿執筆要領

1) 投稿原稿は原則として Word ファイルで作成することとする。

2) A4 判横書きで、字数・行数は 38 字×37 行、フォントは日本語が MSP 明朝、英語は Times New Roman とし、いずれも 10.5 ポイントを使用する。

3) 投稿原稿の長さは本文、文献、図表を含めて 20 枚以内とする。但し編集委員会が認めたものはこの限りではない。

4) 使用言語は日本語ないし英語とする。

5) 論文と研究ノートの場合、日本語の原稿には英文アブストラクトをつけること。長さは 200 words 以内とする。（英文原稿の場合も同様。）

6) 脚注境界線以外の線を絶対に入れないこと。

7) ページ番号を入れないこと。

5. 原稿の採否

1) 投稿原稿の採否は、査読を経て編集委員会が決定する。

2) 採否の通知は投稿者へのメールによって行う。

3) 査読の結果修正を求められた場合、修正原稿は編集委員会が定めた期日までに再提出すること。期日までに再投稿されない場合は、投稿を取り下げたものとみなす。大幅な修正が必要とされる場合には、改稿の上次号に再投稿するようすすめることがある。
4) 査読委員あるいは編集委員会の判定により、原稿の種類の変更を著者に求めることがある。これは主に研究論文と研究ノートの間の変更になる。
5) 最終投稿原稿を受け付けた時点をもって「受理」とする。
6) 著者校正は一度のみ行う。（この時点は語句の誤りの訂正などにとどめ、それ以上の加筆修正は認めない。）

6. 著作権
掲載された著作物の著作権は本誌に所属する。ただし著者は非営利目的で複製し、翻訳することができる。その場合はその著作物が本誌に掲載されたものであることを明記すること。

7. その他、文献の表記などは暫定的に『通訳翻訳研究』の投稿規定にあるものを参照して下さい。

＜研究倫理について＞
＊執筆にさいして考慮すべき研究倫理について以下に一般的な指針を述べますが、大学等研究教育機関に所属されている方は、当該大学ないし機関で設けている研究倫理指針に従って下さい。

○論文として投稿する際には適正な倫理的配慮が行われていなければならない。
1. 論文投稿においては捏造、改ざん、盗用などの不正行為は認められない。
1a. 捏造とは、存在しないデータ、研究結果、文献などを作成することを言う。
1b. 改ざんとは、研究資料、研究プロセスを変更して、得られた結果を加工することである。
1c. 盗用とは、他の研究者などのアイディア、方法、データ、結果、論文の内容などを、了解を得ないで、あるいは適切な表示なしに流用することを言う。

2. 以下のような不適切な発表方法をとらないこと。
2a. 二重投稿：著者自身がすでに公表していることを告知せずに、同一内容の原稿を投稿し発表することを言う。
2b. 業績の水増し：既発表の論文に内容が類似し、その論文を発表することの意義を認めるのが困難で、査読を担当する研究者に無用な手間を強いるような原稿を投稿すること。
2c. 利益相反 Conflict of interest：経済面での利益や損失などの利害関係のために、論文の客観性に影響を与えたり、あるいは与えるおそれがあるとみなされたりすることを言う。

3. 著作権

3a. 著作権に関する規定やガイドラインを参照し適切に利用すること。

3b. 他人の著作物（図表を含む）を利用する場合には著者の了解が必要である。著作権が出版社などにある場合は出版社の許可が必要になる。

3c. ただし著作権法の保護対象外の著作物、保護期間終了後の著作物、許された目的と範囲内での引用、教育や試験のための利用は著作権者の了解は不要である。

3d. 引用は適切に行う（出典の明記など）。

4. インフォームド・コンセント Informed consent

被験者を使う場合、研究者は被験者に対し研究について事前に十分な説明を行い、その意義、目的、方法等を理解させ、被験者となること及びデータ等の取り扱いに関して被験者の自由意志に基づく同意を得ていなければならない。

5. 個人情報の保護について

5.a 研究を公表する際には被験者を特定できないようにすること。

5.b インフォームド・コンセントを得る際に説明した以上の個人情報を取得しないこと。

5.c 個人情報を不正な手段により取得しないこと。

5.d 個人情報が漏洩しないよう安全管理を行うこと。

＊詳しくは、日本学術振興会「科学の健全な発展のために」を参照。

http://www.ritsumei.ac.jp/research/file/rinri.pdf

水野翻訳通訳研究所 (MITIS)
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-3-3
パレス御茶ノ水 1 号館 402
a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp
https://mitis.webnode.jp/